

人生をかけた日本語教育  
—実践と研究をつなぐ二人の対話—

ガリーナ・ヴォロビヨワ

伊藤広宣

キルギス共和国  
2017年

УДК 811.521

ББК 81.2

В 75

**В 75 ПРЕПОДАВАНИЕ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА, СТАВШЕЕ СУДЬБОЙ. ДИАЛОГИ.** Галина Воробьева и Хиронори Ито.  
— Б.: Фаст принт, 2017 — 80 с.

ISBN 978—9967—28—325—1

Авторы данной книги в год 25-летия со дня установления дипломатических отношений между Кыргызской Республикой и Японией в форме диалогов рассказывают об истории, проблемах и задачах преподавания японского языка в Кыргызской Республике. Также каждый из авторов рассказывает о пути, которым пришел к преподаванию японского языка и научным исследованиям, и о своих научных достижениях. Один из авторов родился в России, а другой в Японии, один из них по образованию математик, а другой юрист, но оба стали ведущими специалистами в системе преподавания японского языка в Кыргызской Республике. Авторы также размышляют о культуре России, Японии и Кыргызстана. Книга представляет интерес не только для специалистов-япониистов, но и для всех читателей.

ヴォロビヨワ・ガリーナ 伊藤広宣  
人生をかけた日本語教育—実践と研究をつなぐ二人の対話—

本書の2人の著者は、キルギス共和国と日本国の外交樹立25周年にあたり、対話形式にてキルギス共和国における日本語教育の歴史・問題・課題について語っております。さらに、著者のそれぞれは、日本語教育、学術研究への道に至った経緯、及び、各人の学術業績についても言及しております。著者の一方は、ロシアで生まれ、他方は、日本生まれです。一人は、数学を、もう一人は、法律を大学にて修めておりますが、いまや両者は、キルギス共和国における日本語教育界の主導的立場として活躍しております。著者2人は、ロシア・日本・キルギスの文化についても思索を広げております。本書は、日本語研究を専門とする方々のみならず、一般の読者のために執筆されたものです。

В 4602020500—17

УДК 811.521

ББК 81.2

ISBN 978—9967—28—325—1

© Воробьева Г.Н. Ито Х. 2017

© ヴォロビヨワ・ガリーナ 伊藤広宣 2017年

---

---

## 推薦の辞

日本から遠く離れたキルギス共和国。この国で、なぜ日本語を学ぶ人が後を絶たないのでしょうか。遠い日本への憧憬、日本人とどこか共通した容姿、テュルク諸語という日本語に近い言語構造を持っているからなど、いろいろな理由があるのかもしれませんが、本書をお読みになれば、このお二人の力があってこそ、日本語を学ぶ環境整備、そして動機が高まったのではないのかがよくお分かりになると思います。

ガリーナ・ヴォロビヨワ先生と伊藤広宣先生、このお二人は見事に対照的です。非母語話者で徹底的に日本語に魅せられたガリーナ先生と、日本語母語話者でロシア語、キルギス語学習に超人的に取り組まれた伊藤先生。ガリーナ先生は漢字・漢字教育研究に打ち込まれ、『漢字物語』という漢字教材を作成されました。伊藤先生は公的な対外折衝の仕事として、キルギス・ロシア教育アカデミーにて、学長補佐(2010年より)、ビシケク人文大学にて、学長顧問を務められています。

このお二人の教育、薫陶を受けた次世代の学生さんが多々いらっしゃいます。私は筑波大学国際室中央アジア地域責任者の職務を担っており、キルギスからの学生さんに多く出会いますが、今回、本書からなぜ日本に留学を希望するのか、改めてよくわかりました。

ガリーナ・ヴォロビヨワ先生と伊藤広宣先生は対照的ではありませんが、このお二人の対談では、実にいろいろな先生のお名前が登場します。この先生には何を学んだとか、この先生は何をおっしゃったとかなど、教育の強い力、必要性を感じます。お二人は崇高な教育人であります。

本書が、キルギス共和国のみならず、中央アジア諸国、そして日本語教育の萌芽地域での日本語教育の普及に必ず有益な示唆を与えていることを祈念しております。

2016年12月

小野正樹

筑波大学人文社会系・教授・中央アジア地域責任者

本書は、キルギスと日本の国交樹立 25 周年を記念して執筆されたと聞いています。本書の登場により、キルギスの日本語教育がどのように発展してきたのか、歴史的な経緯を知ることができるようになりました。ここでは、著者の一人であるヴォロビヨフ・ガリーナ氏が、日本語教育の学術研究において、どのような役割を果たしているのかを簡単に紹介したいと思います。

## 1. 世界的な活躍

ガリーナ氏は日本でも数多くの研究発表や講演の実績がありますが、ハノイ大学で 2013 年 10 月に開催された国際シンポジウムではベトナム国の招待を受けて基調講演をおこない、出席者の注目を集めました。その国際シンポジウムでは日本語教育界で世界的に著名な米国プリンストン大学の牧野誠一教授も基調講演に登壇しました。

## 2. 優れた研究業績

ガリーナ氏はきわめて多くの論文を公刊しています。そのうち、最新（2015 年以後）の学術研究成果を 2 つだけ選んで以下に紹介します。

一つ目は「漢字の構造分析に関わる問題：漢字字体の構造分解とコード化に基づく計量的分析」という論文です。これは、ガリーナ氏とヴォロビヨフ・ヴィクトル氏の共著で『国立国語研究所論集』9 号（2015 年 7 月）に掲載されました。『国立国語研究所論集』は査読付きの学術誌であり、インターネットで論文の PDF が公開されていることもあって、多くの研究者が関心を寄せています。

二つ目は、2016 年 11 月に公刊された『漢字字体史研究 2：字体と漢字情報』（東京：勉誠出版）に収録されているガリーナ氏とヴォロビヨフ・ヴィクトル氏の共著の論考です。これも学術的な価値が非常に高い業績だと評価されています。

このようにガリーナ氏はたいへん優れた研究者です。本書によってガリーナ氏の研究生活の歩みを知ることができます。このことは、キルギスはもちろん、世界中の日本語教育研究の関係者に大きな恵みを与えてくれるに違いありません。なるべく多くの日本語教育関係者の眼に本書がふれるよう願っています。

2016 年 12 月

横山詔一

国立国語研究所教授・東京大学大学院客員教授

---

---

## 序文

2017年1月、キルギス共和国と日本国は外交樹立25周年を迎えます。2016年9月には、キルギス共和国高等教育における日本語教育が、満25年を迎えています。その2つの重要な歴史的な時期に、キルギスにおける日本語教育および日本研究の礎、発展に直接関与してきました私たち2人が、意見交換を通して、この分野での様々な問題や業績を、また、ロシア、日本、キルギスの生活や習慣のいくつかについての観察も読者の皆様方にご紹介するに至りました。

運命が、私たち2人をキルギス共和国へと迎え入れました。そして2人の人生は、この国の日本語教育から離れることのできない運命となりました。ですので、日本語教育について、日本語教育の学術研究についての対話をつづるために、私たち自身の人生をも語ることになりました。私たちは、日本語教育に直接関与してきました当事者として、実体験を通じた過ぎ去った25年の歴史を本書に留めました。

歴史は、各人が自分でつくるもので、その一步一步の歩みに、人生が、左右されます。国の運命も私たち一人ひとりの努力と信念によって変えることができると思います。

読者の皆様方には、幸せな新たな道を、ご自身の夢の実現のご成功を心よりお祈りいたします。

2016年12月  
ガリーナ・ヴォロビヨワ  
伊藤広宣

# 目次

推薦の辞.....	3
序文.....	5
<b>第一章 日本漢字教育のキルギスの研究者.....</b>	<b>7</b>
ロシアからキルギスへ.....	7
日本語学習.....	9
日本語講師.....	14
漢字教育研究の始まり.....	16
漢字教材執筆.....	17
博士号取得への道.....	20
キルギス共和国日本語教師会.....	24
キルギスの日本語教育について.....	27
<b>第二章 最初の日本語講師.....</b>	<b>30</b>
日本からキルギスへ.....	30
大きな嵐の中で.....	33
日本語講師.....	35
高等教育にて日本語学習者を増やすには.....	38
誇りに思う教え子.....	40
学術の道.....	42
<b>第三章 ロシア、日本そしてキルギスを語る.....</b>	<b>50</b>
ロシアについて.....	50
日本について.....	54
キルギスについて.....	60
<b>付録 教え子から.....</b>	<b>68</b>
監修者後記.....	76
著者略歴.....	78

---

## 第一章 日本漢字教育のキルギスの研究者

### ロシアからキルギスへ

**伊藤** この 11 月に、『漢字字体史研究二 字体と漢字情報』という本が発行され、その第三部にガリーナ先生とご主人のヴィクトル先生の論文が掲載されているとお聞きしております。おめでとうございます。

**ガリーナ** ありがとうございます。

**伊藤** 北海道大学の名誉教授と国立国語研究所の先生方が、編集しているとのこと。その本にガリーナ先生夫妻の名が連なっていることに感動しております。素晴らしいですね。私は、まだ、その本を読んでいないのですが、どんな本ですか。

**ガリーナ** それは日本語学、文献学、歴史学、考古学、仏教学、心理学、情報学、日本語教育学等のさまざまな分野を横断した漢字字体と漢字情報に関する文字研究、人文学研究を含む本です。勉誠出版という学術出版社で発行されました。

**伊藤** 何かとても複雑で、難しそうですね。そこに、ガリーナ先生方が、確か非漢字系のキルギスの研究者として書かれているのですね。

**ガリーナ** そうです。私たちは、「非漢字系日本語学習者の漢字学習の支援を目指す漢字構造記述」という論文を載せました。

**伊藤** ところで、ガリーナ先生は、ロシア生まれのロシア系の人ですので、ずっとキリル文字が、生活の基盤ですね。キルギスでも、町中お店の名前、広告などキリル文字で表記されています。キルギスには、どのくらい住まわれていますか。

**ガリーナ** 1974年からキルギス共和国に住んでいます。もう、40年以上になります。

**伊藤** そんなになりますか。ところで、どうしてキルギスにお住まいになられるようになったのですか。

**ガリーナ** 私はロシアのイルクーツク市で生まれました。その後、ウラル山脈に位置しているスヴェルドロフスク市（現在エカテリンブルグ市）に両親と一緒に住んでいました。学校で勉強していたとき様々な科目に興味を持っていましたが、一番好きな科目は数学でした。学校を卒業してウラル国立大学の数学・力学部に入学しました。専攻は数学でした。私は真面目な大学生で、試験の前には、時間を大切にして、絶対に試験に関係のない本を読みませんでした。でも、ある日、試験の前に友達がキルギスの作家チンギス・アイトマートフ氏の本を貸してくれました。「ジャミリヤ」などが、入った中編小説の本でした。試験の後で読もうと思いましたが、初めてアイトマートフ氏の本が手に入りましたから、ちょっとだけ覗いてみました。非常に感動的で、途中でやめられず、試験の準備を忘れて、最後まで読んでしまいました。そのときまでキルギス共和国については、学校の地理学や歴史の授業では、学んでいましたが、しかし、アイトマートフ氏の小説のおかげでキルギスという国の心に触れることができたという感じでした。その後、私は、興味を持って新しく出版されるアイトマートフ氏の小説を読むことにしました。そして、キルギス共和国に対する関心がだんだん高まってきました。

**伊藤** 私もモスクワに留学している時、初めてアイトマートフ氏の作品を読みました。日本語でしたが、とても感動しました。「ジャミリヤ」もモスクワで読んでいます。

**ガリーナ** そうでしたか。お互いアイトマートフ氏の本に影響されたのですね。私は、その後、大学を卒業して、旧ソ連の科学アカデミーに入っているウラル科学センターの数学・力学研究所の研究者として仕事をしました。そして1974年に有給休暇の時に、主人と一緒にキルギスに行って首都フルンゼ（現在の首都ビシケク）とイシククリ湖を訪ねました。キルギス人の中にチンギス・アイトマートフ氏の小説の主人公のジャミリヤ、ダニヤル、ヅェイシェン、アルトィナイ、アセーリのような人がいるとわくわくして、キルギスの人の顔を興味深く見ました。キル



ギスはとても気に入ってロシアに帰ってからすぐ研究所の仕事を辞めてキルギスに引っ越しました。そのとき 25 歳でした。

**伊藤** そうでしたか。私もガリーナ先生と同じく 25 歳の時にキルギスにやってきました。ところで、ロシアに帰ってからすぐに引越しされたとお伺いしましたが、ご主人やご両親など反対は、されなかったのですか。また、キルギスでのお仕事の見当は、おありでしたのでしょうか。

**ガリーナ** 有給休暇の時に、主人と一緒にキルギスを訪れたので、二人で決めました。両親も反対しませんでした。主人は予め仕事を見つけていましたが、私はまだ決まっていませんでした。キルギスに引っ越してから、私は、キルギス国営電力会社「キルギスエネルゴ」の仕事を見つけました。

**伊藤** そこまでして、キルギスに引越するほど、何が、ガリーナ先生を魅了したのですか。

**ガリーナ** キルギスの自然とチンギス・アイトマトフ氏の小説です。

**伊藤** アイトマトフ氏がお聞きになったら、きっと、とても喜ばれたに違いありません。残念ながら、もう、2008 年に他界されました。

**ガリーナ** 私は、アイトマトフ氏の小説をすべて読みました。彼は、キルギス国民の代表者であるだけでなく、全ソ連の代表的な作家です。

## 日本語学習

**伊藤** ガリーナ先生の日本語学習にテーマを戻しますが、先生は、46 歳で、キルギス日本センターで、日本語を学びはじめたと聞いています。

私は、いつも日本語学習者のみならず、私の知り合いに、46 歳から日本語を勉強したロシア人の女性で、その後、日本語の先生になり、ついには、博士号を取ったすごい人がいるので、みんなにも頑張れと励ましております。ところで、どのようなきっかけで日本語を学ぶようになったのですか。

**ガリーナ** 私は、若いときには、将来日本語を勉強して、日本語教師になるなどということは、夢にも思いませんでした。でも不思議なこと

にそうになりました。キルギスに移住してキルギス国営電力会社「キルギスエネルゴ」の自動制御装置部門に就職しました。仕事の内容はプログラミングでした。技師、上級技師、課長、それから部長代理として働きました。キルギスエネルゴは約 14000 人が働くキルギスの一番大きい国営会社でした。私は、自分の仕事が大好きで、その会社で 25 年間働きました。

どうして日本語を勉強しはじめたのか、どんな目的だったかとよく聞かれます。正直に言えば、実際的な目的は、全くありませんでした。またキルギスに引っ越したきっかけと同じように読書が日本語学習のきっかけになりました。子供のころから日本に興味を持っていました。日本についての本を読むのが好きでした。1966 年に発行されたニコライ・フェドレンコによる『ソ連大使の日本ノート』などを読みました。そして 1970 年代に旧ソ連で日本についての本『桜の枝―ソ連の鏡に映った日本人』が大人気でした。それは日本で仕事をしているジャーナリスト、フセヴォロド・オフチンニコフが執筆したものです。それらの本を読むにつれて、日本は私にとって特別な国になり、日本についての本を収集するようになりました。日本は他の国と違って、歴史的なものや近代的な技術が共存している魔法の国だと思いました。

キルギスの大学の日本語教育は 1991 年に始まりましたが、私のような社会人が勉強できるコースはありませんでした。1995 年に、キルギス共和国と日本の両国政府の合意によりビシケクでキルギス日本センターが開かれました。そのとき新聞で日本センターの日本語講座の募集広告を読みました。外国語は、若いときに覚えたほうが良いという考えは一般的です。私もそう思いました。46 歳のおばさんが申し込んでも、絶対に落ちるに決まっていると心配していましたが、でも主人は「諦めてはいけない」と言って一緒に申し込みました。無料のコースということもあり、とても多くの方が、応募しました。驚いたことに主人と二人とも合格しました。最初は趣味として日本語を勉強しはじめました。そして日本語学習によって、新しい世界を開いて、新しい人と接して自分の生活が豊かにできると期待していました。

**伊藤** 私は、ご主人のヴィクトル先生も存じ上げておりますが、物静かな紳士で、大人格者とお見受けしております。ご主人の暖かい励ましで合格を勝ち取ったのですね。日本語を学ばれてどのようなご苦勞をされたのでしょうか。また、初めての授業を受けられた時は、どのようなお気持ちでしたか。

**ガリーナ** 主人は私の日本語学習、その後の日本語教育研究に欠かせない存在でした。たくさんのサポートをしてくださいました。キルギス日本センターで日本語の勉強を始めたとき日本語の先生が 2 人いました。主な授業を萩原幸子先生に教えていただきました。そして浦部大輔先生は LL 教室で聴解の授業をしていました。私と一緒に入学した同級生は、ほとんど、20 代から 30 代の若い人たちでした。

最初の萩原先生の授業の印象をよく覚えています。先生は日本語の挨拶の言葉を聞かせて、私たちに、繰り返して言わせました。そのとき耳だけを使って、目を使わないで覚えるように、教材を見てはいけなと言われました。私はそれまでは日本語からロシア語に入った「さくら」、「いけばな」、「げいしゃ」、「はらきり」、「じゅうどう」、「すもう」、「たたみ」などの言葉を聞いたことがありましたが、日本人が言う日本語の言葉を初めて聞きました。「はじめまして。どうぞよろしく申し上げます」というような言葉を繰り返して言ってみたら、「こんなに長い、言いにくい言葉は一生覚えられない」と思いました。さらに若い同級生は目から覚える私より簡単に耳から覚えている感じで、私は不安になりました。

不安を感じましたけれど、始めたことを途中でやめてはいけなと考えて勉強を続けました。先生は最初の授業から平仮名を教えはじめました。週 2 回授業があり、毎回「あいうえお」など平仮名の五十音表の 1 行と語例を覚えなければなりません。先生は語例の発音をテープに録音してくださいました。そして毎回授業で書き取りをしました。初めて平仮名を見て、このような、形が複雑な文字が覚えられるかと心配になりました。でも先生は全力を尽くして教えてくださったので、私もそれに応じて困難に負けず一生懸命頑張らないと恥ずかしいと思いました。日本語学習で主人とお互いに助け合いました。頑張れば頑張るほど勉強が楽しくなって、成績もよくなりました。平仮名と会話を覚えるために授業以外にも毎日うちでたくさん勉強しました。新聞と本を読んだり、テレビを見たりする時間さえなくなりました。仕事以外は日本語だけが私の心の糧になりました。教室で書き取りがよくできるようにうちでテープを聞きながら何回も語例や文を書く練習をしていました。

平仮名の勉強が終わって大きい平仮名テストがありました。萩原先生は私のテストを返却するとき「ガリーナさんの採点は A+++ です。間違いが一つもありません。今までインドネシア、イタリア、アメリカで日本語を教えました、誰にもこのような採点をしたことがありません」と言ってくださいました。私はとても嬉しかったです。

**伊藤** 平仮名学習を終え、次は、片仮名学習ですね。

**ガリーナ** 片仮名も同じ方法で語例が録音されたテープを使って勉強しましたが、萩原先生の片仮名の教え方の特徴は「アイウエオ」の順番ではなく、「キルギス、ビシケク、スポーツ」などという単語に含まれる文字の学習配列でした。その指導法を利用して先生は私たちに達成感を与えてくださいました。平仮名と片仮名を学習した際に私はテープを聞きながら書き取りをした以外に他の学習ストラテジーも利用しました。例えばどこでもいつでも復習ができるように平仮名カードと片仮名カードを作りました。

**伊藤** そうでしたか。次は、漢字学習に入りますね。

**ガリーナ** 平仮名と片仮名を習得するために大変な努力が必要でしたが、漢字学習が始まると、「以前は花だったが、今は実」というロシアのことわざを思い出しました。花が咲いた後、その木に実ができますね。実ができると花を忘れます。つまり、苦しいことがあって、その後もっと苦しいことがあれば、以前苦しく感じたことはそんなに苦しく感じなくなるといことです。平仮名、片仮名の勉強は苦しいとも思わなくなりましたが、漢字の習得の大変さに辟易しました。頑張っても漢字がなかなか覚えられない、覚えても、すぐに忘れてしまうので、日本語学習をやめようかと思うほど苦しかったです。

仮名学習の場合は書き方、読み方と語例を覚えるだけでよかったです。漢字学習の場合は個々の漢字の複雑な字体、筆順、複数の意味、複数の読み（音と訓）、部首、語例、熟語、文脈での使用法などを覚えることが必要となりました。学習対象漢字も多く、全て覚えられるものかと悩みました。また漢字辞典の調べ方も非常に難しく感じました。しかし、たぶん仮名学習の苦労のため日本語学習に対して我慢強くなって、だんだん漢字学習にも慣れてきました。

**伊藤** 漢字は、非漢字系の人たちにとっては、とても大変ですね。

**ガリーナ** はい。漢字学習が難しく主にもそのせいで諦めて日本語の勉強をやめた同級生が多かったです。一緒に 60 人勉強しはじめましたが 32 人しか初級 2 に合格できませんでした。漢字学習をしはじめる大人の非漢字系日本語学習者は同じ学習をしはじめる日本人の子供と考え方が

ずいぶん違います。日本人の子供は生まれてから周りの漢字を見て、それを学習すべきだ、学習しないと生活ができないという考えがいつの間にか脳に入ります。それに対して非漢字系学習者の脳の準備はまったくなく、漢字学習を始めてはじめてショックを受けるのは当然のことです。そのため非漢字系学習者には漢字学習の予備段階が必要だと思いました。

漢字を覚えるためにうちで何回も書いて、漢字カードと漢字ポスターを作りました。また、日本語学習者だったときから主人ヴィクトルと一緒に漢字学習の体系化と効率化を目指して漢字教育に関する研究をはじめました。最初の段階では漢字を構成している画（ストローク）の種類の種類確定、そのアルファベット・コード化、アルファベット・コードの順番で並べた漢字カードのセット、音声辞典のように漢字辞典で調べられるようにアルファベット・コード索引の作成に取り組みました。その研究成果を1999年に4年間の日本語コースを卒業する前に冊子にして出版しました。

**伊藤** それは、おそらく私が推薦者を頼まれた本です。ヴィクトル先生から頼まれたという名代が、私のところへ来て、私に推薦人になってほしいと頼まれて、承諾しています。

ところで、話は横にそれますが、ガリーナ先生が初めて日本へ行かれたのは、いつでしょうか。日本センターを卒業されてからでしょうか。それとも在学時のときですか、そして、日本に行かれたときのエピソードか何かあれば、教えてください。

**ガリーナ** 2年生のころ萩原先生のご推薦で3週間のCIS諸国日本センターの成績優秀者招聘プログラムで初めて日本に行くことができました。そのとき東京と札幌を訪ねました。高層ビル、高速道路、夜の町の光、古いお寺と神社に憧れました。日本語で話す機会を得て、色々な人と話しました。残念ですが、プログラムの関係者以外は私の国のことをだれも知りませんでした。日本の入管係員でも初めてキルギス共和国のパスポートを見たようです。パスポートを驚いて見られて、キルギスはどこにあるかと聞かれました。

日本で「初めまして。ガリーナ・ヴォロビヨワと申します。キルギスから参りました」と自己紹介をするとき「キルギス」という国の名前を言うと、ほとんどの相手は「イギリス?」「ギリシア?」「キリギリス?」と何回も聞きなおしました。私は「キルギス共和国は旧ソ連の国で中央

アジアに位置していて、カザフスタンとウズベキスタンとタジキスタンと中国と国境が、接しています」と毎回説明しました。

日本で講義を聞いたり、見学と見物をしたりしました。日本と日本人に接したことは勉強の刺激になりました。

**伊藤** キルギスという国は、日本の人は、あまり知られていませんね。もう 7 年前になりますが、私の長男が、キルギスの学校の夏休みの期間に、妻の留学先の筑波大学で、妻と暮らしておりました。長男は、近所の子供たちと遊んだとき、よく、どこから来たかと聞かれたそうで、「キルギスから来た」というと「イギリス?」とよく言われたそうです。息子は、説明するのも面倒なので、「そう、イギリス」と答えていたそうです。

ガリーナ先生は、お仕事と日本語学習とのかけもちで、大変であったと思いますが、4 年間最後まで、頑張ってきた理由は、何だったのでしょうか。

**ガリーナ** 私のような年齢で、全く知らない言語の勉強ができるのかと自分自身疑問に思っていましたが、萩原幸子先生が、全力で教えてくださり、私も先生の熱意に動かされ、頑張りました。一生懸命頑張って 4 年間の日本語コースを卒業しました。一年生の時は、一緒に入学したものと 60 人で学んでいましたが、その中から 4 年後に中級Ⅱを卒業したのは、6 人だけでした。日本語コースを卒業しても自律学習をしていました。その結果 2003 年に日本語能力試験 1 級に合格しました。

## 日本語講師

**伊藤** 私は、萩原先生は、よく知っております。仲良くしていただきました。ガリーナ先生は、卒業後、日本センターの日本語講師になられておりますね。

**ガリーナ** いえ。日本語を教えはじめたのは、4 年生の時でした。私が日本語コースの 4 年生になったころキルギス日本センターのビデオコースを担当していた浦部先生は帰国しました。萩原先生は浦部先生の代わりに私に 3 ヶ月のビデオコースで初心者日本語と日本文化を教えることを勧めてくださいました。1998 年 10 月から週 1 回の授業をしはじ

めて、教師の仕事の魅力と喜びを感じました。目がきらきらした 60 人の学習者を前に教室で授業をしてから、気持ちがよくて、疲れるどころか、エネルギーをたくさん得て、まるで背中に翼ができて、空を飛びたくなるほど幸せでした。

4 年間勉強して日本語コースの卒業の前に萩原先生は日本センターの常勤講師になることを勧めてくださいました。それで、私は迷っていましたが、コンピューターの仕事をやめてキルギス日本センターの 50 歳の新米の日本語教師になりました。新しい道を開くのは年齢に関係がないことがわかりました。重要なのは自分の力を信じることです。

キルギス日本センターには様々な教材と素晴らしい教具がありました。LL 教室もあって授業のとき学習者にビデオを見せたり、テープを聞かせたり、テープに録音したりする可能性がありました。図書室で辞書などを使うことができました。日本センターは各々の学習者に学習用の本教材および漢字、文法などの副教材、仮名練習帳などを使わせました。さらに授業でクラス活動や聴解用のプリントを配りました。つまり、キルギス日本センターの日本語教師も、学習者もとても恵まれていました。

萩原先生のご支援と教師用の手引きのおかげでだんだん教授法を習得しました。さらに国際交流基金日本語国際センターの海外日本語教師短期研修に参加させていただいて重要な知識を得ることができました。私は主に初級Ⅰと初級Ⅱクラスとビデオコースの学習者に日本語を教えていましたが、中級Ⅰと中級Ⅱのクラスでも読解、聴解、翻訳、漢字などを教えていました。2003 年に JICA に移管して新しい名称になったキルギス日本人材開発センターの主任講師として働いていました。主任講師として学習者に日本語を教えると同時に教師の指導をしていました。教師に教授法を説明したり、一緒に授業をして私のやりかたを学んでもらったり、授業を観察して、教授法の改善のためのアドバイスをしたりしました。

日本センターの後はキルギス国立総合大学の上級講師として働きました。

**伊藤** ガリーナ先生のお言葉には、勢い、力を感じます。私は、今、50 歳ですが、改めてガリーナ先生を見習い、これから頑張っていきます。また、萩原先生の肝いりで、日本語講師になられたのですね。萩原先生は、ガリーナ先生の日本語教育者としての資質を見抜いておられたのでしょう。

**ガリーナ** ありがたいことです。運が良かったと思います。50歳で新米の教師になって、新しい世界に飛び込みました。生活スタイルは、ずいぶん変わってしまいました。萩原先生について一生懸命頑張りました。先生の授業を見学させていただいたり、指導させていただいたりしていました。萩原先生の帰国後私の上司だった国際交流基金日本語教育専門家中林理江先生、その後黒滝力先生のご支援、ご協力もとても重要でした。豊富な知識を持っていた中林先生と黒滝先生の授業の見学や教授法に関するアドバイスは教師としての成長のサポートになりました。日本語の文法、日本事情などに関するどの質問でもすぐわかりやすく完全な答えを聞かせていただきました。ご協力をしてくれたキルギス日本センターの同僚だったチョンムルノフ・ティムールさんや渡邊知積さんも暖かく思い出します。

## 漢字教育研究の始まり

**伊藤** 漢字を研究されることになったきっかけは？

**ガリーナ** ある日、一人の日本語に無関係の友達に私の日本語の教科書を見せてほしいと頼まれました。教科書を見せると、驚いて、私に聞きました。「あなたは一体どうやって漢字を見分けるの。みんな同じじゃない。ほら、みんな小さい家の形をしているじゃない」日本人はこれを見て驚くかもしれませんが、初めて漢字を見る非漢字系の人のこのような反応は当然だと思います。

生まれてから毎日漢字を見て、子供のころから漢字の勉強をしはじめる日本人と大人になって初めて大学か日本語コースで日本語の勉強をしはじめる非漢字系の人は、違う入り口から漢字の世界に入ると言えるでしょう。さらに日本人と違う入り口から入って、違う道を踏みながら同じ目的地を目指しています。私は2000年に富士山の頂上まで登りました。その気持ちをよく覚えていて、漢字学習を富士山への登山に例えます。日本人の子供は車で5合目まで登ってからゆっくり迷わずに頂上に向かいますが、非漢字系の人は山の一番下の所から登りはじめて、こんもりとした森を通して、石でおおわれた険しい坂道を苦労して歩むというような感じです。

私も日本語学習者としてその道を乗り越えたので、日本語教師になって、後ろからその漢字学習の坂道を登る私の後輩の学習者のために少し



でも道を歩きやすくするように努力しようと思いました。そして私がつまづいた石を片付ける方法を探していました。でも、そのとき漢字指導法に関する本や論文などは手ごろなもの、ありませんでした。漢字の勉強の問題点を分析して、もし私が学習者に漢字の形と意味の関連をより詳しくてわかりやすく教えたら、覚えやすくなるのではないかと考えました。運よく、そのときキルギス日本センターの図書室にあった『漢字は難しくない』という武部良明先生が執筆した本が手に入りました。私はその本を見て「これだ！」と思いました。その素晴らしい本との出会いが私の漢字の研究の出発点となりました。

**伊藤** その武部先生の本は、どんな本でしたか。

**ガリーナ** 漢字の成り立ちを説明するストーリーを含む本でした。私は、武部先生のストーリーと自分で考えたストーリーを混ぜて日本語の生徒に漢字の形と意味を説明するとき使いはじめました。学習者は、とても興味を持って聞きました。私も嬉しくなって、1年間ぐらいストーリーの原稿を書きながら漢字を教えました。学習者にとって漢字の勉強は少し楽しくなりましたが、彼らはストーリーの本がなかったため、時間が経つにつれてストーリーを忘れて、漢字の形もだんだん忘れしました。それに私が集めたストーリーを他の教師は使うことができなかったので、残念でした。漢字の形と意味を覚えるためのストーリーを中心に、語例のロシア語訳が付いた、教師と学習者が使えるような初級レベルの日本語とロシア語の教科書を執筆することが私の夢になりました。

**伊藤** その夢がどのように、発展していったのですか。

## 漢字教材執筆

**ガリーナ** 2003年に国際交流基金日本語国際センターが、新しいプログラム「海外日本語教師上級研修」の参加者を募集しました。全世界から10人だけの日本語教師が参加できるプログラムでした。私は研究プロジェクトとして初級Iレベルの漢字教科書の執筆の案を作成して、応募しました。嬉しいことに、2004年の第1回海外日本語教師上級研修に参加させていただきました。私の指導教員は日本語国際センター専任講師八田直美先生でした。私と一緒に中国、韓国、カンボジア、インド、オ

ーストラリア、フィンランド、カナダ、ブラジルからの研修生も参加しました。その中の 4 人が日本人でした。2 ヶ月の研修の間は図書館にある色々な資料を読んだり、教材作成などに関する授業に参加したり、八田先生に相談したり、作成途中の教材に対して同級生の意見を聞いたりしながら、教科書を作成していきました。

キルギスに帰って、毎日、土日も含めて、夢中になって遅くまで教科書を作成しました。主人と同僚と学習者ができる限り手伝ってくれました。おかげさまで 2005 年のひな祭りの前に日本語とロシア語で執筆された 220 字の漢字を含む初級 I レベルの『漢字物語 I』ができました。これには、伊藤先生にも推薦文を書いていただきました。ここで、改めて御礼申し上げます。

**伊藤** 私は、素晴らしい教材ができたものだと感心しました。先生の本は、大反響でしたね。

**ガリーナ** ありがとうございます。私が『漢字物語』という名前を付けたのは、紫式部の小説『源氏物語』が大好きだからです。教科書と小説の名前の音は似ていますね。教科書の表紙には桜の木の下に座っている紫と源氏が描かれています。それは学習者が表紙だけを見て「あ、楽しそう！漢字の話は童話みたい！」と考えてくれるようにしました。私の教え子のナザルマンベトフ・マルレスさんがコンピューターでデザインしてくれました。

キルギス日本センターで教科書を印刷して 30 人の 1 年生に配って、教室で使いはじめたとき私は嬉しくてたまらなかったです。センターの教師と学習者の評判が高かったのも、それは私にとって刺激になって、すぐ次の初級 II レベルの『漢字物語 II』の執筆の計画を立てました。

2005 年に、キルギス国立総合大学の准教授だった主人ヴィクトル・ヴォロビョフと一緒に、国際交流基金日本語国際センターの日本語教育フェローシップのプログラムに参加させていただきました。目的は 298 字の漢字を含む初級 II レベルの教科書『漢字物語 II』を日本語とロシア語で執筆することでした。指導教員は日本語国際センター専任講師阿部洋子先生でした。そのときは漢字の形と意味を覚えるための連想記憶法の研究だけではなくて、漢字の画（ストローク）と構成要素（部首など）の分析とコード化、新しいタイプの索引の開発、漢字辞書の調べ方、合理的な漢字学習順番の研究などもしていました。

『漢字物語Ⅰ、Ⅱ』は日本語教育で一般に使用される『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』に準拠しました。つまり『みんなの日本語』と一緒に使えるように同じ漢字を同じ順番で並べました。教科書『漢字物語Ⅱ』は2007年2月にできました。ところで、その教科書の作成中次のことがありました。2005年に1年生として『漢字物語Ⅰ』を使って勉強していた学習者が2年生になった同年9月には『漢字物語Ⅱ』はまだできていませんでした。そのクラスの学習者は「早く作成してください。このような教科書がないと私達は漢字が覚えられない」と何回も私に言ってくれました。ストーリーはすでにできていましたが、教科書の形にするのは時間がかかりそうでしたから、私はすべてのストーリーを集めて、プリントして、2年生にコピーを配りました。彼らはうれしそうに漢字学習で使いはじめました。

有名な研究者である当時早稲田大学の川口義一教授と筑波大学の加納千恵子教授に『漢字物語Ⅱ』の推薦をいただき、誇りを持って、教科書に掲載しました。新しくできた教科書をキルギス日本人材開発センターの教室で配った日には学習者も、私も幸せでした。『漢字物語Ⅰ、Ⅱ』はキルギスで出版しました。現在キルギス、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン、ロシア、フィンランド、ベトナム、日本などで使用されています。

また2009年にキルギスにNHKの記者とカメラマンが来て、『漢字物語』についての番組を作るために、私たちの家で私のインタビューとキルギス国立総合大学のジャーナリズム学部の教室で『漢字物語』を使って行われた漢字の授業の撮影をしました。その後、3つの番組「NHK ニュース おはよう日本」とNHKBS1「アジアクロスロード」と「NHK World NEWSLINE」で放送されました。

**伊藤** 素晴らしいですね。私も川口先生、加納先生とは、立ち話程度のお話をしたことがありますので、存じております。お二人ともガリーナ先生のことをとても気に入られておりました。ところで、先生は、覚えていらっしゃるかどうかわかりませんが、10年ほど前、加納先生から教材をキルギスのガリーナ先生に、届けてほしいと預かり、お持ちしたことがあります。

**ガリーナ** はい、よく覚えています。ありがとうございます。それは加納先生が執筆なさった研究論文でした。私の研究のためにとっても役に立ちました。

**伊藤** ところで、私の学生と違い、ガリーナ先生の学習者は主に社会人もしくは、日本語を専攻としない他分野の専攻学生でしたね。彼らは、卒業後、どのように日本語の知識を生かしていますか。

**ガリーナ** 私の教え子の中にキルギス日本センターの日本語コースで日本語を習得したおかげで、専攻は日本語ではなくても、日本に留学ができて、日本の大学で博士号を取得した人がいます。その教え子の中に医学、心理学、政治学、地球物理学、ITなどを専攻した人がいます。その一人は私に日本で留学したときの学習についてこう言ってくれました「日本の大学で中国人の留学生と一緒に勉強しましたが、専門的な文章を読むとき負けませんでした。それは基本的な漢字をガリーナ先生の『漢字物語』を使用して覚えたおかげです」。それを聞いて私はとても嬉しかったです。

そして私の教え子は現在、在キルギス共和国日本国大使館、キルギス日本人材開発センターで働いています。ある日 JICA 事務所に行って、受付の女性が私の教え子だったことに驚きました。日本語の知識を生かして外交官としてキャリアを積んだ教え子もいます。日本語を教えている教え子もいます。日本センターには4年間の本コース以外に3ヶ月の短期ビデオコースもあったため、私が日本語を教えた学習者が多くて、ときどき在キルギス日本大使館やキルギス日本センターが開催する催しに、あるいは街中などで偶然会うことがあります。そのとき暖かい言葉を言ってもらって胸が熱くなります。日本語の知識を仕事などで使っていない私の教え子は、日本語と日本文化に触れて心が豊かになったと信じています。

## 博士号取得への道

**伊藤** ガリーナ先生は日本の大学と大学院で勉強せずに論文博士として日本で博士号を取得されたのですね。それを聞いて驚きました。博士号取得への道はどんな道でしたか。

**ガリーナ** 私は、漢字教材『漢字物語』を発行したあとも、主人と一緒に漢字教育や漢字構造に関する研究を続けました。二人とも理科系で、私の専攻は数学、主人の専攻はITで、漢字の教え方の改善を目指して数

学的な立場から漢字字体を深く見ることにしました。漢字を分解して、計れそうな漢字の質を計って、漢字の合理的な学習順番を考えました。でも研究を進めるためには現在日本で行う計量言語学の先行研究を学ぶ必要があって、日本語国際センターの阿部洋子先生のアドバイスに従って第2回「博報日本語海外研究者招聘プログラム」に申し込みました。そして2007年から2008年にかけて6ヶ月、選ばれた5人の中で国立国語研究所で招聘研究員として漢字の研究をする機会を得ました。一緒にプログラムに参加した研究員はアメリカ(2人)、ベトナムとエジプトからでした。私の受け入れ教員は国立国語研究所の言語生活グループ長、政策研究大学院大学教授横山詔一先生でした。研究する際に大学で得た数学とコンピューターの知識も活用しました。3つの側面について研究を行いました。

第一に、1945字の常用漢字の構成を分析して、漢字の最小形態的単位である画と最小意味的単位である構成要素を確定して、コード化して、コンピューターのプログラムでその画と構成要素の使用頻度などを計算して、グラフや表の形で示しました。

第二に、学習対象漢字の合理的な順序について検討しました。つまり、一般に使用されている教材を対象にして、構成要素と漢字のコード化とコンピューターソフトを使用して学習対象漢字の提出順序を分析しました。

そして、第三に、連想法にもとづいて漢字の意味の記憶法について研究しました。

分析のために必要なソフトは主人のヴォロビヨフ・ヴィクトルが作成してくれました。研究の成果はロシア語で執筆した漢字指導の手引でした。

**伊藤** お話をお聞きするにつけて、これは、文系の頭ではなく、理系です。ガリーナ先生は、数学部を卒業されていますし、ロシアの大学院でも数学を研究され、お仕事も技術系ですので、そうした学問、職歴をされた先生ならではの研究ですね。ところで、博士論文の執筆のアイディアは国立国語研究所での研究のとき生まれましたでしょうか。

**ガリーナ** いいえ、それは後のことでした。2010年に東京国際大学の川村よし子教授の研究プロジェクトの共同研究員として日本にいたとき、当時日本語教育学会会長だった名古屋外国語大学教授尾崎明人先生と東京でお会いしました。尾崎先生は私の研究活動の話聞いて、研究は価

値があると判断してくださいました。そして日本に論文博士として博士号を取得できるシステムが存在しているということを教えてくださって、日本語で博士論文を執筆して、そのあと受け入れる大学を探すことを勧めてくださいました。私は驚きました。博士論文の内容はもちろん、一番重要ですが、ノンネイティブの私に日本語で博士論文が執筆できるか、という疑問を持っていました。

キルギスに帰って尾崎先生のアドバイスについて考えていました。実は私にとって博士論文の作成は博士号を取得する手段としてよりも、漢字教育の見方や、漢字教育に関する様々なアイデアを具体的に、さらに総合的に一つの文章で表す可能性としてとても魅力的でした。尾崎先生は例としてインターネットにある論文博士の手続きに関する名古屋外国語大学の書類の URL を教えてくださいました。尾崎先生のアドバイス、ご信用、ご支援が刺激になって私は博士論文の構成、課題を考えはじめました。そしてできる限り漢字教育に関する研究論文、本を読んでいます。そのとき筑波大学の加納千恵子先生からいただいた資料もとても役に立ちました。

**伊藤** それで、その後は、どうされたのでしょうか。

**ガリーナ** はい。その後、再び同じプログラム第 6 回「博報日本語海外研究者招聘事業」に合格して 2011 年から 2012 年に 1 年間国立国語研究所で研究しました。受け入れ教員は再び横山詔一教授でした。研究目的は非漢字系日本語学習者の漢字学習の体系化と効率化でした。研究内容は漢字字体の計量的分析、非漢字系の日本語学習者に対して使える効率的な漢字指導法や漢字を覚えやすくする漢字教材の開発でした。研究中横山先生の貴重なアドバイス、ご支援を受けました。研究の成果を基に博士論文を作成しました。

論文博士としてどこの大学に申し込めばいいかわからなかったので、日本語国際センターの阿部洋子先生と久保田美子先生に相談して、政策研究大学院大学を勧めていただきました。それから当大学の日本言語文化研究プログラム（博士課程）ディレクター近藤彩准教授に私のことを紹介してくださいました。そして帰国前にできた博士論文を政策研究大学院大学に内容確認のため提出しました。

帰国後近藤先生から改善のための貴重なコメントとアドバイスをいただいて、キルギスで博士論文の作成を続けました。そして 2013 年に国際交流基金のプログラムで、京都にある国際日本文化研究センターの外来

研究員として日本にいるとき、博士論文を政策研究大学院大学の予備審査に提出しました。予備審査が終わって審査員の先生方から貴重なアドバイスをいただきました。予備審査と本審査を経て、2014年3月に政策研究大学院大学で審査員の先生方と他の研究者の前で博士論文の発表をして、5月に念願の博士号を取得しました（論文博士、日本語教育研究）。博士論文の題目は「構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化」です。

博士論文を作成中、日本の研究者や以前一緒にキルギス日本語教師会で活動していた先生方から原稿に対するコメント、励ましの言葉を受け取りました。特に政策研究大学院大学の八木敦子先生と津田塾大学の関麻由美先生は熱心に原稿の校正と重要なコメントをしてくださってとても助かりました。

**伊藤** 論文審査の先生方は、どのような方々でしたか。

**ガリーナ** 実は予め審査員はどなたか教えていただかなくて、発表のとき審査員をしてくださったとても有名な研究者、講師であった先生方とお会いしました。審査委員長を務めてくださった政策研究大学院大学の近藤彩先生をはじめ、政策研究大学院大学の大山達雄先生、早稲田大学の川口義一先生、日本語国際センターの久保田美子先生、国立国語研究所の横山詔一先生がいらっしゃいました。近藤先生、川口先生、久保田先生、横山先生は存じ上げていましたが、政策研究大学院大学の理事、公共政策プログラム（博士課程）ディレクターである大山教授には初めてお会いしました。4人の審査員は日本語研究と日本語教育関係者でしたが、大山先生の研究分野の中に「数理計画法」、「数理モデル分析」も入っていて、私の博士論文の計量的な部分を詳しくご覧になって、評価してくださいました。1時間の発表をしてから審査員の先生方から質問、コメントをいただきました。その発表の日を一生忘れられません。審査員の先生方による博士論文の評価が高かったと言われました。審査員の先生方は私の博士論文の内容を深く理解して将来の研究の課題に関する貴重なアドバイスもしてくださって、とても感激しました。

ところで、博士号を取得して、帰国する前に面白いエピソードがありました。日本の論文博士制度を教えてください、日本語で博士論文を執筆するように勧めてくださった尾崎明人先生に、お礼を言うために名古屋に行きました。先生と奥さんとレストランにいるとき、私は博士号を取得できたのは尾崎先生からアドバイスをいただいたおかげだとお礼の

言葉を言いました。尾崎先生は笑って答えました。「アドバイスはしましたが、ガリーナさんが実際にやれるかどうか僕は分かりませんでした！」

博士号取得への道を歩む際に国際交流基金の日本語教育フェローシップと日本研究フェローシップ、博報日本語海外研究者招聘事業、京都大学教育研究振興財団短期招聘助成などの研究プログラムに参加して、国立国語研究所、国際交流基金日本語国際センター、国際日本文化研究センター、京都大学、東京国際大学にて有意義な研究ができました。そして数年間国立国語研究所共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」の共同研究員として活動しました。上記ご支援、研究活動がなかったら博士号取得はありえなかったです。

**伊藤** おめでとうございます。大変ご苦労された結果、これほど素晴らしい大きなご研究をされたのですね。ところで、今はどんな活動をなさっているでしょうか。

**ガリーナ** 実は、研究すればするほど現場の漢字教育と漢字教育研究の間に大きいギャップがあることが明らかになりました。そこで、漢字教育研究成果を現場の教育に生かすためにもできる限り研究活動を続けています。今までの研究成果を生かし、研究論文などを公開したり、国際研究大会などで研究発表をしたり、ワークショップをしたりしています。日本語教育国際研究大会やヨーロッパ日本語教育シンポジウムでも発表をしたことがあります。今まで日本とキルギスをはじめ、ロシア、中国、韓国、ベトナム、ドイツ、トルコ、ウズベキスタン、カザフスタンなどで研究発表をしました。Eメールを通して世界の日本語研究者、日本語教師と交流しています。

## キルギス共和国日本語教師会

**伊藤** 今後の研究活動のご成功を祈っております。ところで、ガリーナ先生は、キルギス共和国日本語教師会にて、ずっとその発展にご貢献をされておりますね。4年間会長を務められたり、現在は、教師会会報編集委員長も務められたりしております。教師会の活動などをみなさんにご紹介してください。

**ガリーナ** キルギス日本語教師会は1999年から規約と内規を定めて、正式に活動をしています。教師会はキルギスにおける日本語教育の発展



を図ることを目的として、日本語教育に関する情報交換、日本語教師のお互いの協力、交流の場となっています。国際交流基金「さくらネットワーク」に加入しています。

私は 1999 年にキルギス日本語教師会に入りました。1999 年から 1 年間会計係でした、それから 2000 年から 2004 年まで教師会会長を務めました。現在キルギス日本語教師会会報編集委員長を務めていて、私と一緒に編集委員会にヤネズ・ミヘリチチ先生とガリーナ・ロディナ先生が入っています。そして西條結人先生とジュヌシャリエワ・アセーリ先生と一緒に研究紀要『キルギス日本語教育研究』の編集委員会にも入っています。教師会の主な活動はキルギスおよび中央アジア日本語弁論大会・日本語教育セミナーの開催、作文コンクールや朗読コンテストの開催、教師会会報の発行（1 年に 3 回作成）、キルギス共和国日本語教師会紀要『キルギス日本語教育研究』（1 年に 1 回作成）の発行、教師会のホームページの作成 (<http://jlkyoushikai-kyrgyz.jimdo.com>)、公開授業の参観、教師養成コースや教授法の勉強会、教授法のセミナー等です。原則として 2、3 ヶ月に 1 回会合を行っています。キルギス日本語教師会の活動について Wikipedia でも読むことができます (<https://ja.wikipedia.org/wiki/キルギス共和国日本語教師会>)。

2008 年より定期的に「チュルク諸国日本語教育セミナー」が開催されて、チュルク諸語と日本語の類似性を生かした日本語教育に関する議論・研究がされています。アゼルバイジャン、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、トルクメニスタン、トルコの研究者が参加しています。

主な行事については 3 つの教育機関（キルギス日本人材開発センター、国立ビシケク人文大学、キルギス国立総合大学）の日本語教師が実行委員として企画、運営しています。

在キルギス共和国日本国大使館、キルギス日本人材開発センター、JICA 事務所、キルギス日本人会などがキルギス日本語教師会の活動の支援をしてくださっています。

キルギス日本語教師会は団体として 2015 年 8 月には、日本国外務大臣表彰を受賞しました。

**伊藤** あらためておめでとうございます。私もこのニュースは、存じております。草創の日本人の先生方、ガリーナ先生のご尽力の賜物だと思います。教師会の活動は、多岐にされており、目を見張るものです。

このように活発な教師会ですが、ガリーナ先生が、ご苦勞されたことを教えてください。

**ガリーナ** キルギス日本語教師会の活動はキルギスの日本語教育にとって重要な役割を果たしています。教師会は 1990 年代にキルギスで仕事をしていた日本人教師（キルギス日本センターの萩原幸子先生やビシケク人文大学の三井勝男先生）の努力のおかげでできました。でも当初、日本人教師は活発に日本語教師会の活動に参加しましたが、現地教師の会員はあまり多くなかったという問題がありました。

私は会長になって現地教師も教師会の活動に積極的に参加するにはどうすればいいのかを考えて、教師会の活動についての情報を広めるために教師会会報を発行することを提案しました。そして 2000 年から会報が日本語とロシア語で発行されて 2016 年には、第 42 号が発行されました。会長だったとき私は全ての会報のロシア語の文章をチェック、校正しました。現在会報編集委員長を務めて、面白く読める原稿を載せるようにしています。そして有名な日本の研究者に記事を依頼して掲載します。例えば、名古屋外国語大学外国語学部日本語学科教授、大学院国際コミュニケーション研究科長、元日本語教育学会会長の尾崎明人先生、元早稲田大学の教授川口義一先生、早稲田京福日本語学校校長・GNK 日本語能力試験監修委員長北嶋千鶴子先生などの先生方の記事を掲載しました。最近キルギスについての日本人の記事も投稿してもらっています。さらに私自身経験した日本文化、日本事情についての記事も掲載します。

キルギス日本語教師会会報は、ヨーロッパ日本語教師会の会員などに読んでいただくように、世界の日本語教育関係者に送ります。現在会報はアジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、アフリカの国々の日本語教師に読まれています。さらに会報は現在アフリカのケニアで国際交流基金日本語専門家として活動をしている、以前 JICA ボランティアとしてキルギスに来て、ビシケク人文大学で働いていた高橋知也先生によってインターネットにもアップロードされていて、すべてのバックナンバーを読むことができます ([https://www.evernote.com/pub/tm0y/kyrgyz\\_vestnik](https://www.evernote.com/pub/tm0y/kyrgyz_vestnik))。第 1 号からの会報は国際交流基金日本語国際センター図書館にも所蔵されており、そこで読むことができます。

さらに私は会長として作文コンクールを提案しました。そのために日本で NGO ヒューマン・アンド・ジオサイエンスの岩田昭夫氏という協力者を見つけて 15 年ぐらい作文コンクールを行いました。岩田さんから

毎年素晴らしい賞品と参加賞を受け取りました。残念なことに岩田氏は今年亡くなりました。

教師会の活動が広がるとともに現地会員の人数も増えてきました。そして現在たいいていの場合、教師会の活動（日本語弁論大会、日本語教育セミナー、日本語能力試験など）の実行委員長は現地教師です。会員数は、40人以上です。

**伊藤** ガリーナ先生は、教師会の宝です。今後のご活躍をお祈りいたしますとともに、教師会の発展も心よりお祈りいたします。

**ガリーナ** ありがとうございます。

## キルギスの日本語教育について

**伊藤** ガリーナ先生から見られたキルギスの日本語教育についての問題点などお聞かせください。

**ガリーナ** ソ連時代にキルギスでは日本語教育が存在しませんでした。日本語を学びたいものは、ロシアの教育機関で勉強していました。ロシアの日本語教育は18世紀初頭に、皇帝ピョートル一世の命令によって始まって長い歴史を持っています。モスクワ国立総合大学附属アジア・アフリカ諸国大学、サンクト・ペテルブルグ国立総合大学、極東国立総合大学などの30以上の高等教育機関で日本語が教えられています。

キルギス共和国では、1991年に日本語教育がスタートして、そのときから日本語教育機関数も増えて、めざましい発展を遂げましたが、近年日本語学習者の人数が減少してきて、様々な問題もあります。現在、主な問題点は、大学の卒業生が日本語の知識を生かす仕事が非常に少ないことです。また、日本語教師を育てる国内制度が、ないことなどです。以前、日本語教育学会会長だった名古屋外国語大学の尾崎明人先生は、日本語教育制度には日本語を教えることだけではなくて、日本語の知識を生かして仕事ができる環境を作ることも入っているとおっしゃいました。キルギスではそのような環境はまだ作られていません。

ひとつ付け加えます。日本語学習者が日本語を習得する際に、最大の困難となる要因は漢字学習です。キルギス語の文法は日本語の文法と似ています。キルギス語ができる日本語学習者にとって、日本語の文法は

習得しやすいものです。そして聴解も、日本語の発音も問題になりません。それに対して漢字学習は、表音文字であるキリル文字とローマ字に慣れている非漢字系のキルギスの日本語学習者にとって大きな問題になっています。

2010年に30名の1年生を対象に、あるビシケクの大学で私が行った調査によると、初級の学生は主に「漢字を何回も書く」、「熟語を何回も書く」、「カードを作って漢字を覚える」という学習法を使っていることが明らかになりました。キルギスで行われている漢字指導法については、主に漢字と熟語を繰り返し書くことや、丸暗記することなどの定着・確認型の機械的な練習が行われています。キルギスの漢字教育の問題点の中には漢字教材の不足、教師の教授法の知識の不足、漢字指導の時間の制約などの問題もあります。このように、非漢字系漢字学習者は漢字に対して問題を抱えていて、漢字学習は丸暗記に頼る無味乾燥なものになってしまいがちですが、漢字の形・音・字義・熟語・文脈での使用法などを教えるにあたって活動を用意し、楽しく教えるように工夫することが重要です。キルギスをはじめロシア語圏、非漢字圏の日本語教師が使える、漢字字体の計量的分析に基づいた効率的な漢字指導法や漢字を覚えやすくする漢字教材の開発が必要とされていて、私の研究は漢字学習の体系化と効率化の上で意義があります。

ところで、キルギスの日本語教育研究の発展についてちょっとお話します。私が知っている限りでは、日本で学位を取得したキルギスの日本語教育関係者の多くは、キルギスに帰らないで日本やロシアなどで活動をしています。キルギスで活動する日本語教育研究者の育成が課題になっています。キルギスの日本語教育関係者は、日本に行って研究する可能性も限られています。キルギス日本語教師会が研究発表と研究論文公開の可能性を与えていることは、研究者の育成にとってとても重要です。できるだけ多くの会員がこの機会を利用したほうがいいと思います。

**伊藤** そうですね。キルギスからは、結構、日本の大学院に入学をして、マスター号を取得したものも、博士号を取得したものもいます。しかし、残念ながら、学業を終えて、日本に残るものが多いです。キルギスに戻ってくる人も教職・研究職についている人は、一人か二人です。やはり、キルギスの大学は給料が少ないので、どうしてもビジネス、通訳者、もしくは、お役所のほうに気がいくのでしょうか。将来、日本で学位を取ったものが、キルギスの舞台上で活躍してほしいと思います。と

ここで、ガリーナ先生のお好きな言葉を教えてください。また、その言葉は、人生にどんな影響を与えておりますか。

**ガリーナ** 「諦めない」です。その言葉の通りにするようにしています。

**伊藤** とても含蓄のあるお言葉ですね。ガリーナ先生の人生の行動から、どーんと強く響いてきます。さて、日本語と出会ったことがガリーナ先生の人生を大きく変えたのですね。この章の終わりに、みなさんに、先生から何かメッセージを送っていただけませんか。

**ガリーナ** 日本語との出会いのおかげで私の生活はずいぶん変わりました。日本の文化と日常生活に触れて、日本人の友達もできて、日本は親しみのある存在になりました。日本へ行くたびにまるで母国に帰ったように感じています。日本語を利用して、研究ができるようになって、日本をはじめ、世界の国々で研究発表をして、世界の日本語研究者、日本語教師と交流ができました。私の日本語学習と日本語を生かしてきた経験から現在日本語を学習している人に伝えたいことがあります。

日本は素晴らしい国で、きれいな自然、人々の親切さ、古い歴史、高度な科学と技術に触れることができます。しかし、日本をよく理解するためには日本語の知識が重要です。目標を設定して、年齢に関係なく勇気を出して、自分に相応しい学習法を探して、一生懸命日本語を学習することを勧めたいです。

キルギス日本センターは私に日本語を学習する機会を与えてくださいました。そして私の日本語研究にあたっては国際交流基金、国際交流基金日本語国際センター、博報財団、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、政策研究大学院大学、京都大学、東京国際大学、筑波大学などの機関のご支援をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

---

## 第二章 最初の日本語講師

### 日本からキルギスへ

**ガリーナ** 2016年8月30日キルギス国立大学にて、「今日のキルギスの日本研究ーキルギス共和国における日本研究25周年」国際会議が開催されました。この会議は、伊藤先生のキルギス共和国教育活動25年を祝う会議でもありました。日本語教育関係者と他の研究分野の研究者だけではなく、有名な人も出席しましたね。伊藤先生は、自分の25年の活動に関する祝辞を聞いて、あらたに発心されただろうと思います。

**伊藤** ありがたいことです。その国際会議には、山村嘉宏在キルギス共和国日本国特命全権大使、今井成寿在キルギス共和国 JICA 事務所副所長、2人の国会議員、モルドガジェフ・リスベク前キルギス共和国日本大使をはじめ、日本人の大学の先生、ビジネス関係者、キルギスの著名な学者・教育者が参加して、お祝いの言葉や基調報告がされました。歌手の三田りょうさんやカザフスタンの建築士の日本人の方々も来られておりました。ガリーナ先生におかれては、「キルギス共和国における日本の漢字の研究の歴史について」というテーマで、基調報告をしていただきまして誠にありがとうございました。参加者は、先生の報告を耳を澄まして聞いていました。

**ガリーナ** ありがとうございます。会議の模様を、私がキルギス日本語教師会会報編集委員長をしているキルギス共和国日本語教師会報第42号で、報告しました。ところで、伊藤先生は、どのような運命でキルギスに来ましたか。

**伊藤** キルギスに来るきっかけを話すと長くなるのですが。。

**ガリーナ** どうぞ、ご遠慮なく。

**伊藤** それでは、なるべくまとめて話します。まず、「キルギス」という名前をはじめて耳にしましたのは、私が、モスクワへ留学する直前でした。前年モスクワ大学に留学されていた先輩から、モスクワの友だちにキルギス出身の学生たちがいるが、彼らに写真を渡してもらえないかと頼まれました時でした。写真を見ると、日本人に似ている人たちだなどという印象を持ちました。

それから私は、1988年9月に1年の留学のために旧ソ連邦モスクワへ行きました。モスクワでの留學生活が始まってまもなく、先輩から預かった写真をキルギス人たちに渡すことができ、かれらと友達になりました。10月になると日本から連絡がありました。ソ連を代表する作家で、キルギス出身のチンギス・アイトマートフ氏という作家が、私の大学の創立者、池田大作先生と会見するとの話でした。そこで、私は、アイトマートフ氏について知ろうとキルギス人の友だちに話を聞いてみました。キルギス人は、アイトマートフ氏本人や彼の作品をこよなく愛しているかのように、熱っぽく私に語りました。のちに、日本の友人から日本で出版されていたアイトマートフ氏の作品をモスクワに送ってもらい、「ジャミリヤ」、「最初の教師」、「母なる大地」などを読みました。とても感動して、キルギスに興味を持ちました。

モスクワでの留學中は、キルギスの友だちを通じて、中央アジア出身の友だちがとても多くできました。キルギス人、カザフ人、ウズベク人、タジク人です。残念ながらトルクメンの友人は、いませんでした。

キルギスの出身の友人に、時々、将来アイトマートフ氏の故郷のキルギスに行って、日本語を教えるよと話していました。もちろん冗談でしたが。。

そして、留學が終わり、日本へ戻りました。日本に戻り、就職も考えましたが、学究心がありました。今度は、ウラジオストクの極東国立大学へ留學しました。留學中に、キルギス出身の学生と友だちになり、その彼に、モスクワ時代の友人の写真を見せると、彼の高校時代の同級生や知り合いが写っていて、意気投合しました。私は、是非ともキルギスに行きたいという気持ちが高ぶり、大学が冬休みになった1990年の1月末にキルギスに来ました。キルギスの空港に着くと、先にキルギスに着いていたキルギスの友人が迎えてくれました。町へ向かう車の中で、「君の事をキルギスの大学がとても興味を持っているので、明日話しに行こう」と言われました。

言われるままに、翌日、大学の関係者に会うと、ぜひ日本語を学生に教えて欲しいと頼まれました。突然の話で、びっくりしました。実は、その年の秋にウラジオストクの大学と大学院に入学する話を決めてきたばかりでありましたので、考えました。

**ガリーナ** で、どうして、キルギスの方を選んだのですか。

**伊藤** キルギスの滞在は、5日間でしたが、5日間滞在する間に、キルギスは、食べ物がおいしく、食材も豊富でした。他方、かつてのウラジオストクは港町ですから、もちろん海産類は豊富でしたが、バザールで売られていた野菜、肉は、あまり新鮮ではなく、貧弱なものばかりでした。ウラジオストクの気候は、極寒で、前に歩けないくらい風が強かったのですが、キルギスは、ソフトでした。でも一番の理由は、彼の親戚、友人と多く知り合い、とても歓待を受け、キルギスの大学からも熱心な要望もありましたので、それらに心が打たれ、もう、キルギスへ行かなくてはいけないという気持ちになり、私は、誰とも相談せずに、3年契約の契約書にサインをしました。

**ガリーナ** 思い切った決断でしたね！それで、キルギスに来られたのですね。

**伊藤** そうですが、実は、キルギスに来るにあたり、両親から猛反対されました。

**ガリーナ** どうしてですか。

**伊藤** 父には、私が、モスクワに行き、ウラジオストクに行き、そして今度は、キルギスに3年間？もう、いい加減にしろ、贅沢は言わないので、日本のどこでもいいから就職しろと言われました。実は、もともと私が、モスクワへ行くことも反対していました。私は、父にモスクワ大学との交換留学生試験は希望者も多いので、おそらく合格するのは無理だと言いついて聞かせて受けました。受かるかどうかわかりませんでした、合格しました。ウラジオストクの時も、頼みました。もう、3度目。実は、私が東京で勉強することも反対で、地元愛知の大学へ行くことを希望しておりました。それを押し切ったのも併せると4度目になってしまいました。



**ガリーナ** そうでしたか。ご両親も大変だったと思います。

**伊藤** 何の恩返しをすることもなく、もう父は、他界しております。父からしてみれば、私は親不孝でしょう。日本では、長男が両親の面倒を見る習慣がありますので。結局、私は、今も日本から遠いキルギスに住んでいます。今、母が、一人で住んでいます。

**ガリーナ** お母さんをキルギスに呼べばいいのではないですか。

**伊藤** 私も心配して、何度もまじめにキルギスへ呼ぶ話をしていますが、母は、嬉しいけど、言葉も通じないし、誰も知り合いがないので、ぼけてからお世話になるとか、いろいろ話をはぐらします。母の周りには、母のようなひとり者のお隣さんがいっぱい暮らしており、話し相手が多いようです。見知らぬキルギスに来るより、その方が気が楽かもしれません。

## 大きな嵐の中で

**ガリーナ** キルギスには、いつ来られましたか。

**伊藤** 今でも覚えています、1991年8月20日でした。

**ガリーナ** ゴルバチョフ大統領が、幽閉され、クーデターが起きていた真っ最中ではないですか。

**伊藤** そのとおりです。そのクーデターが起こった日に日本を出ました。

**ガリーナ** キルギスに来るのは、怖くありませんでしたか。

**伊藤** 怖いというよりは、大変なことが起こってしまったなと思いました。クーデターの騒動が、いつどんな形で終わるのが、全然見当がつきませんでした。今、ソ連に行かないと、次はいつキルギスに行けるのか。ひょっとして、全く行けなくなるのではないかと不安になりました。幸いクーデターは3日で無事終わりましたが。

思い出しますが、1991年8月19日のこと。キルギスには、私以外に2人の大学の後輩と来ました。後輩は、キルギスでロシア語を学ぶためです。ロシア語は、本場ロシアで絶対学んだ方がいいという人が多くいました。でも私は、キルギスとロシアのロシア語は、同じレベルで何の問題もないし、キルギスには、いろんな魅力があると2人を誘いました。彼らもキルギスに興味を持ち、一緒に行くことになりました。その一人は、ガリーナ先生も知っている人です。

**ガリーナ** 誰でしょうか。

**伊藤** 浦部大輔君です。

**ガリーナ** ああー、浦部先生？

**伊藤** そうです。もう一人は、山田中道君。3人は、当時東京から新幹線で新潟に行き、新潟ーハバロフスクービシケクというコースでエアチケットを買っておりました。その日は、私たちは、新潟駅に着きました。各人の荷物がとても多かったので、新潟駅から一人ひとりタクシーに乗って新潟空港に行くことにしました。私は、タクシーの中で、タクシーに取り付けてあった小型のテレビで、例の事件を見ました。空港に着くと後輩2人もクーデターのことを知っておりました。私が、彼らにどうするかと訊ねると、彼らは、躊躇なくキルギスに行くと言いました。私たちが飛行機に乗り込むと、ほとんど人は乗っていませんでした。日本の地方からのソ連への訪問団・代表団のすべての団体が、キャンセルしていました。個人で飛行機に乗る人もまばらでした。私たちは、無事にキルギスに着くことだけを祈りました。もし、クーデターが、私たちの出発の前日であれば、私たちの両親、友人たちは、きっとキルギスに行かないように強く説得していたに違いありません。

**ガリーナ** そうでしたか。大変な時期に来られましたね。浦部先生には、日本センターの日本語コースで学びました。とても明るい先生で、学生から人気がありました。

**伊藤** キルギスに彼がいた頃は、いろいろ彼に助けられ、今でも感謝しています。彼は、教育学部で学んだ人で、キルギスでは、1年間ロシア語留学をした後、日本の大学を卒業して、1993年9月から日本語の先生を5年間しました。キルギス国立総合大学、ビシケク人文大学、アメ

リカ大学、日本センターなど、掛け持ちで、日本語の教鞭を執りました。彼が、ずっとキルギスに残っていれば、お互いに協力し合って、日本語教育の発展に大きく寄与できたことと思います。彼の成功をいつも願っております。

## 日本語講師

**ガリーナ** ところで、伊藤先生は、キルギスに来る前から日本語を専門に勉強していたのですか。

**伊藤** キルギスへ日本語講師として行く前、親しい先輩などに、私がかうまく日本語を教えることができるのか心配されていました。私は、それまで、進学塾で国語の授業を教えた経験があり、モスクワ、ウラジオストクに留学していたときには、現地の日本語学科の学生にも教えた経験もありましたので、それなりに自信はありました。また、各学部から、各学年からなる自由聴講授業を教えるのだと思い込んでいましたし、人に何かを教えることも好きでしたので、全然心配しておりませんでした。

**ガリーナ** 結構、軽いお気持ちだったんですね。

**伊藤** はい。それが、キルギスに来てからわかったことが、キルギス国立総合大学の歴史学部に日本語、中国語、アラビア語、トルコ語の一言語と歴史を専門とする専門家を養成する東洋学科が、設立されました。日本語の授業は、9月23日に始まりました。最初は6人の生徒でしたが、その後、1ヶ月以内に、4人が他言語から移ってきました。そうして、10人の学生に1年間日本語を教えました。

**ガリーナ** 日本語は、どうやって教えたのですか。

**伊藤** 授業は、1週間5回でした。1コマは、80分授業でした。はじめに、平仮名を1日に5つ、挨拶の表現、単語をテーマ別に教え、文法は、「Aは、Bです」の構文からはじめ、肯定文、否定文、過去形、過去否定文、形容詞を付け加え、次第に動詞や、助動詞などを教えていきました。

日本からとりあえず、2冊参考書を持ってきました。けれども参考にしただけで、ほとんど使いませんでした。毎日、テーマを考えて、ノートに授業内容を書き込み、授業に臨みました。

ガリーナ 何か授業で、苦勞されたことは、ありますか。

伊藤 空き教室もなかったり、チョークもない日があったりしました。まして、コピー機などはありませんでした。教材も 1 年生にあうのは、まったくありませんでした。ですから、私が黒板に書いたこと、私が話したことだけが、教科書でした。

キルギス 1 年目は、まだ、1 クラス持つだけでしたが、2 年目は、教育省の改革で、現キルギス国立総合大の歴史学部の東洋語学科が、現ビシケク人文大学の新設の東洋学・国際関係学部に編入されました。キルギス国立総合大もキルギス文学部に、新たに東洋語コースを新設し、日本語を学習するグループを 2 つ作りしました。2 年目は、私の学生時代に少しだけ面識のある東京外国語大学大学院生の佐々木伸一郎さんを日本語講師として招待しました。キルギス国立総合大学 2 グループ、ビシケク人文大学 1 年、2 年の 2 グループ、計 4 グループを 2 人で、分け合いました。

3 年目もまた、グループが増えていきました。その年は、浦部君も日本語講師になり、2 大学で教鞭をとりました。4 年目、5 年目は、私のさらに招待した先生や、ユーラシア協会などの友好団体から派遣された先生方が、日本語教育に取り組みました。そうした中、1995 年には、日本センターが、開設されたことを覚えております。キルギスの 5 年目の終わりの 1996 年夏にビシケク人文大学から、5 年制の学生とキルギス国立総合大学から 4 年制の学生が卒業しました。キルギス 6 年目からは、その卒業生の中から日本語講師になるものが出て、両大学の講師不足は、補われていきました。私は、第 1 期生の卒業生が出た後、ビシケク人文大学を辞めて、キルギス国立総合大学だけで、教鞭を執ることになりました。キルギス国立総合大学の東洋学部のアバズベク・アタハーノフ学部長が、自分の学部だけに力を入れてほしいと強く頼まれたからです。

その後、1998 年 7 月、私に大きな転機が訪れました。アタハーノフ先生から、現キルギス国立大学（当時キルギス国立教育大学）に東洋語を主専攻とするカレッジを作るので、私に手伝ってほしいと頼まれたのです。

私は、その時点で、キルギス 7 年目が終了しておりました。大きな大学に安住しておりましたが、アタハーノフ氏が、東洋語学の新しいダイナミックな発展を私と一緒にしたいと熱心に私に語るのです。

私は、彼には、それまで、幾度かひとかたならぬお世話になっておりました。今が、彼に恩返しをするチャンスだと思いました。彼の教育へ

の理想とエネルギーにも打たれ、私は彼を手伝う約束をして、総合大学を辞めました。

翌週、私たちは、キルギス国立教育大学の学術評議会に出席をして、審査の受け答えをしました。その評議会の席上、カレッジ設立の許可をもらいました。と同時に私は、カレッジ学長顧問に任命されました。その場で突然任命されたのには、私自身びっくりしました。

**ガリーナ** 私は、そのようなカレッジができたことを知っています。日本語の学生が、たくさん入学したと聞きました。

**伊藤** 当時、そのカレッジは、珍しい形態でした。カレッジは、私立なのに、国立大学の付属というのです。今では、法律上許されないのですが、その当時は、許されたのです。そのカレッジは、日本語訳でキルギス国立教育大学付属東洋言語文化大学と名づけられました。日本人の中には、大学の中に大学があるのは、変だという人もいましたので、後に東洋言語文化カレッジという名で、日本人には説明しました。私は新生募集担当になりました。積極的にマスコミで広告を流したり、大学見学などに訪れた入学希望の人たちに、私たちのカレッジの説明をしたりするなど多くの大学入学希望者に勧誘をしました。その結果、無名ながら 325 人入学し、うち 116 人日本語を選択しました。日本語のグループは、11 グループできたのです。これは、キルギスで結構な話題になりました。

しかしながら、そのカレッジも後にキルギス国立大学に吸収合併され、今では、学部として残っております。

私の感覚では、キルギスの教育界では、しばらく、この後日本語教育の編成など、特に大きな動きはありません。ビシケク人文大学、キルギス国立総合大学、キルギス国立大学、そしてキルギス日本人材開発センターが、主要日本語教育機関として、活動しました。ビシケク人文大学は、氏原名美先生を中心に、キルギス国立総合大学は、ドゥイショノワ・ナリーザ先生や JICA の海外青年協力隊の日本語隊員、国立大学は、私が、センターは、数年毎に変わる日本語専門家とガリーナ先生が、日本語教育を推進しておりました。

大きな動きがありましたのは、2010 年の夏のことです。私は、日本語の先生や他言語の先生あわせて 16 人と一緒に、キルギス国立大学を辞めました。しかし、キルギス国立大学を辞めてからも、時々、キルギス国

立大学へは、足を運んでいます。私の指導教官のムサエフ先生が働いていて、友だちのエミール・カニメトフ副学長がいますので、大学へは、何かの学術会議やセミナーの話や個人的な相談事にとったり、のってもらったりしに行きます。ところで、私が、同国立大学を辞めたことを知らない同僚だった先生の中には、最近見ないねと声をかける方もいます。私が、もう大学をとくにやめて別の大学に移動していますと答えるとびっくりされる先生もいます。ですから、私が、まだ、今でもキルギス国立大学で働いていると思っている人は、それなりにいると思います。

キルギス国立大学を辞めた年の 2010 年からは、キルギス・ロシア教育アカデミーに、翌年には、ビシケク人文大学に再び戻りました。現在は、両大学に勤めています。

**ガリーナ** キルギス・ロシア教育アカデミーの学長は、女性の学長だと思いますが。

**伊藤** そうです。チナーラ・シャケーエワ学長です。彼女は、キルギスにおける心理学の第一人者です。女性が私の上司になったのは初めてなので、最初は、いろいろと気を使いました。今では、仲良しになり、お世話になっております。ちなみに、その大学の多くの管理職は、女性です。副学長、学部長、教務部長や人事部長なども女性です。

**ガリーナ** 女性が、社会で活躍していますね。

**伊藤** そうです、日本も女性が社会で多く活躍できるように推進していますが、同大学は、男性が、活躍する女性を陰で支えています。

## 高等教育にて日本語学習者を増やすには

**ガリーナ** キルギスの日本語教育 25 年を振り返って、思うことをお聞かせください。

**伊藤** 私の来た時代は、ろくな教材もなく、機材もありませんでした。講師不足もありました。次第に、日本の国際交流基金からや民間団体より図書寄贈、機材寄贈があり、徐々に設備も講師も足りてきました。私が、2000 年代取り組みましたのは、大学の若手講師の資質向上でした。

これも、成果をあげました。日本語教師会でも、もちろん日本語教育のためにいろいろなことに取り組んでいます。

**ガリーナ** 私が、前章で少し話題にした卒業生の就職先と日本語学習者の数の低下について伊藤先生のご意見をお聞かせください。

**伊藤** 日本語学習者数の歴史を振り返りますと、キルギスでは、1991年に東洋語の専門分野ができました。日本語コースもそのひとつです。最初の年は、10人、2年目は、2大学で、39人でした。この数は、多いかどうかといえば、他の東洋言語学習者の中では、一番学習者が多かったのです。日本語の学習者は、1990年代は、中国語、ハングル語よりも人気の高い言語でした。各大学は、競って、首都に、地方に日本語コースを開講しました。残念ながら、2000年以降、日本語の人気は、次第に、かげりがでてきて、中国語の学習者が、どんどん増えていきました。その理由は、一番が、卒業後の就職先です。キルギスには、どんどん中国人が入ってきて、卒業生を仕事に斡旋しています。それと中国への留学できる数が、ものすごいです。日本も最近、日本へ行く留学の門戸が広がっていますが、中国への留学は、その比ではありません。ハングル語にも学習者は抜かれました。一時、日本語は、高等教育機関では、第二外国語を含めて、700人以上の学習者がいましたが、3年前の調査では、300人を切りました。日本語学習主要大学は、かつて、3大学が、挙げられました。キルギス国立総合大学、ビシケク人文大学、キルギス国立大学です。その3大学のうち、人文大学は、安定した入学者が入っていますが、残りの2大学は、存続が関わるくらいの学生数です。地方大学の州都でも日本語教育はなされておりましたが、イシククリ国立大学やジャラル・アバード国立大学など閉講になっております。いつか、また開講されることを望んでいます。

**ガリーナ** 日本語学習者数を増やすには、どうすればいいでしょうか。

**伊藤** 日本は、ずっと外国人に対して、特に仕事関係への門戸は、あまり開かれておりませんでした。学習者を増やすには、卒業生に日本語を使える就職先を増やすこと。もし、キルギスで日本語を使う仕事に、多く就けるようになれば、また、簡単に日本へ行って、仕事に就くことができれば、さらに大きな効果になります。そして、奨学金を受けられる留学生の枠が、今の何倍にもなれば、そして、うまく広告をすれば、

自然と日本語学習者の数は、増えていくはずですが、幸いに最近では、日本政府も留学や、キルギスでの日本企業支援などを積極的に行っておりますし、JICA などが、さまざまなプロジェクトを通じて、日本語通訳など日本語の卒業生を採用しています。日本の大学もグローバル時代になり、海外進出の動きがここ数年活発に行われており、日本の 10 を超える大学が、それぞれのパートナー大学とキルギスの大学との間に、学術協定を結んでいます。この交流は、学生交換や教員交換、共同研究などを柱にしてしております。日本の大学の中で、ひと昔まえから積極的に学術交流を展開していきまされたのは、筑波大学です。筑波大学は、今では、ビジネス科大学、キルギス国立総合大学、キルギス国立大学との学術交流が結ばれており、ここ数年は、1年にキルギスより3大学合わせて10人以上の学生が1年間の留学プログラムに参加しております。

政府関係、企業、大学などが、お互いに力を合わせて進出していけば、相乗効果が必ず出ます。

そこで、ひとつ、注目しているのが、この夏、キルギス国立大学の中に設立された日本学院です。これは、キルギスを拠点としている実業家の四橋道徳さんが、資金面を援助し、私の教え子のサマロフ・アイベクさんが、学院長になって設立したものです。四橋さんは、その前年、人材派遣会社を設立し、日本へスペシャリスト（日本語能力2級以上で、専門性を持った人）を送りはじめました。私も一昨年、数ヶ月、日本への就職が決まった教え子たちに、実践日本語の授業をしました。今まで、日本語のレベルが高いのにキルギスでくすぶっていた教え子たちが、日本で就職できるようになったのです。

さらに、四橋さんは、日本の技能実習制度に目をつけ、それにも取り組んでいます。さらに、語学留学や、学生のインターンシップなどにも取り組んでおります。今後の彼らの発展を祈っております。

## 誇りに思う教え子

**ガリーナ** 誇りに思う教え子は？

**伊藤** 私の教え子と呼べる人たちは、どのくらいいるのでしょうか。おそらく、何百人でしょう。社会でいろいろ苦労しながら一生懸命頑張っている教え子は、みな、私の誇りです。日本語を使って仕事をしていようが、いなかろうが、卑屈に考えることは、ありません。



時々、誰かの何かのパーティーがある時、教え子に会うことがあります。彼らが、私の席に近づき、挨拶してくれることだけで、嬉しく思います。私もその後、彼らの席に行き、今どうしているのか、家族はどうだなど昔話に花が咲きます。心が通じていれば、それほど嬉しいことはありません。

ところで、私たちの第二章の対談のはじめに、国際会議の話題が挙りましたが、その会議に、教え子たちが、学術研究報告や私との思い出や私から教わったことをキルギス語、ロシア語、または、日本語で、原稿を寄せてくれました。ありがたいことです。ここで、日本語教育のことや私の教育姿勢のことが、書かれております教え子の原稿を一つご紹介したいと思います（巻末付録を参照）。教え子の名前は、ジャクシルク・アクマタリエワです。

**ガリーナ** 私もジャクシルクさんのことをよく知っています。国際会議のときは、隣同士で座りました。2014年の春、私は東京にある政策研究大学院大学で博士号を取得しましたね。ジャクシルクさんもその春、東京外国語大学の大学院を卒業して博士号を取得しました。私が日本で研究していて、国立国語研究所で研究発表をしたとき、ジャクシルクさんが出席してくれました。ところで、初めて会った場所は、キルギス日本センターです。ジャクシルクさんはそのときキルギス国立教育大学の教師をしていましたが、日本語の知識を深めるためにキルギス日本センターの中級Ⅱのクラスに入学しました。私はそのクラスで読解と聴解の授業をしました。ジャクシルクさんは成績優秀者でした。その後私がキルギス日本人材開発センターの主任講師だったとき、ジャクシルクさんは非常勤講師として日本センターで働きました。現在ジャクシルクさんは東京外国語大学の職員で、日本で『日本・キルギス研究』という論集を発行する予定です。私もその論集発行に参加するつもりです。

**伊藤** 私は、彼女から日本・キルギス研究会の立ち上げの相談を受けましたので、アドバイスをしました。彼女は、ガリーナ先生にも会う約束をしたと言っていました。その後、ガリーナ先生から原稿を受け取ったという話を聞きました。さすが、ガリーナ先生、お仕事が速いですね。

**ガリーナ** 実は、ジャクシルクさんが文部科学省のプログラムに合格して日本に行くとき、同じプログラムに私の教え子、ナイリャ・ハサノ

ワさんも合格して、一緒に行きました。ナイリャさんは日本センターの成績優秀者で、専攻は医学、眼科です。私と同じように日本センターの日本語コースで勉強しながらビデオコースの学習者に日本語を教えはじめ、卒業後病院での仕事の傍ら、夜日本センターの本コースの学習者に日本語を教えはじめました。日本の福井大学で修士課程と博士課程を経て、博士号を取得しました。私はナイリャさんの教師としてそれを誇りに思いました。ナイリャさんは一緒に福井大学で勉強したインド人と結婚して、現在アメリカに住んでいます。ナイリャさんが執筆したキルギス日本センターでの日本語学習、日本語の知識を生かして活動をしたことについての思い出をご紹介します（巻末付録2を参照）。

**伊藤** 先生の教え子のナイリャさんの先生への尊敬・愛情が、よく伝わってきます。ナイリャさんが、語っておりますが、ガリーナ先生は、いつもお仕事を幾つも抱えておりますが、すごいスピードで、正確にされております。また、忙しそうにみえず、ゆうゆうとされておられます。私もこの点も是非見習いたいと思います。話を戻しますが、私たちの教え子一人ひとりの幸せを祈ります。

## 学術の道

**ガリーナ** 伊藤先生が、学位論文を執筆されるようになりましたのは、どのようなきっかけがありましたか。学位論文のテーマは、何でしたか。

**伊藤** 私がキルギスに来ましたのは、日本語の先生になるのがメインの目的ではなく、ロシア語を勉強したい、ロシア語のレベルを上げるためには、大学院に入学して、専門の研究をすることでした。大学院卒業後は、ロシア語を活かせる仕事を日本でしたいというのが、願いでした。現キルギス国立総合大学とは、契約時に、日本語を教える代わりに、大学院で無料で勉強させてもらうというのが、大きな交換条件でした。

**ガリーナ** それでは、仕方なく、日本語講師になったのですか。

**伊藤** いえ。仮に、ありえないことですが、日本語講師をしなくても、大学院で無料で勉強してもいいと言われても、日本語講師の話があれば、

同意しておりました。大学の講師というステータスは、私にとって、名誉な話だからです。

**ガリーナ** それで、ロシア語を勉強して、大学院で専門を研究されるはずが、どうしてキルギス言語語学を専門とされるようになったのですか。

**伊藤** 私が、キルギスの大学と契約したときは、大学院入学の約束は、ありましたが、具体的な専門分野は、決めておりませんでした。日本へ一時戻って、キルギスに日本語講師として赴任するまでもぼんやりどうしようかと考えておりました。ちょっとソ連のことを知っている人からは、現地語のキルギス語は、勉強するのと尋ねられたこともありましたが、会話程度は勉強したいが、ロシア語がメインですと答えていました。大きな変化は、私がキルギスに赴任してすぐに、キルギス共和国が独立宣言をしたことです。大学関係者からキルギスは、新生国だから、君がキルギス語を勉強するのは、大きな意義がある。君の将来に大変ためになる。大学も政府も応援していると言われました。それで、専門分野をずっと決められずにいた私は、いまや新生国の国家語になったキルギス語を勉強しようという気がおこりました。

**ガリーナ** それで、キルギス語を専門にしようとしたのですね。

**伊藤** キルギス語を専門というよりは、マスターしようと思いました。9月に大学と話し合った結果、キルギス語を知らないのに、今すぐに大学院に入学させるのは、関係者に論理的に説明できないので、キルギス語、ロシア語を2年間みっちり勉強して、その後入学するということになりました。

後から思ったのですが、当初大学院を3年間の約束をしておりましたが、それが、最初の2年は、大学院の準備コース、そして大学院3年の計5年、この間は、日本語を教えるという条件でした。当時、大学教育は、5年制でしたので、要は、今、入学した新入生を最後まで教え、立派な専門家に育ててもらおうという目論見があったのでしょうか。いずれにしても、私をキルギスに招聘してくださった関係者に感謝しております。

**ガリーナ** 語学の勉強は、どのように始めたのですか。

**伊藤** 9月の終わりに、大学は、2人の先生を用意してくれました。キルギス語の先生は、科学アカデミーからその年に総合大学に移った優秀な男性学者で、シルトバイ・ムサエフ先生と紹介されました。その先生が、私の将来の指導教官になると言われました。ムサエフ先生には、みっちり、教えていただきました。のちに先生は、2大学で、副学長、学長をされ、キルギス国営テレビ・ラジオ放送の総裁にもなられております。現在は、キルギス共和国科学アカデミーのアカデミー会員で、キルギス言語学博士論文審査委員会委員長などを務めています。

ロシア語の先生は、エレナ・マトヴェエワ先生で、サンクト・ペテルブルグ国立大学で、博士号を取った優秀な先生だと紹介されました。先生とは、日本語の文法教材を執筆しております。先生は、キルギスの経済困難な時代に、ビジネスのほうに移られてからは、音信不通になり、今どうされているのか、お会いできれば、ぜひお礼をいい、今後ともお付き合いしたいと思います。

**ガリーナ** 勉強のほうは、いかがでしたか。

**伊藤** 毎日 160 分ずつ、キルギス語、ロシア語の授業でした。時間割は、午前中キルギス語、お昼から、私の日本語の授業、午後 3 時前から夕方までロシア語の授業でした。

**ガリーナ** ええー。そんなに多く勉強されたのですか。大変でしたね。

**伊藤** そうです。昼ごはんを食べる時間がないくらいです。ムサエフ先生は、午前 9 時から、キルギス語の授業をしていただきました。ロシア語の授業は、毎日眠気との戦いでした。

**ガリーナ** それで、キルギス語は、すぐに習得したのですか。

**伊藤** いいえ、それが、なかなかレベルが上がらないのです。私の才能がないのか。キルギス語の単語ひとつ覚えると、ロシア語の単語 3 つ忘れるような気がしました。キルギス語は、向いていないかと幾度も思いました。でも、ガリーナ先生もご自身の日本語学習の思い出に言われましたが、始めたことを途中でやめないという気で、粘り強く勉強しました。

**ガリーナ** 伊藤先生はキルギス語学習で苦勞したという話に驚きました。私もキルギスエネルギーで働いたとき、会社のキルギス語コースで4年間キルギス語を勉強していました。キルギス語の文法はロシア語の文法とずいぶん異なるので、ロシア母語話者にとってキルギス語学習は簡単ではないです。しかし、キルギス語と日本語の文法は類似点が多く楽でしょう。私はキルギス語を勉強したおかげで、その後勉強しはじめた日本語の文法はわかりやすかったです。そして教師として学習者に日本語の文法を説明するときよくキルギス語との類似点を強調して、日本語とキルギス語の例文も一緒に示したことがあります。

**伊藤** そうですね。文法は確かに似ていますが、単語は異なりますね。話を続けると、キルギス3年目の秋に、大学院の試験を受けました。英語と哲学、そして専門のキルギス言語学の3科目です。哲学は、4でしたが、英語と専門は、5を取り合格しました。試験に合格してからだと思います。ムサエフ先生が、指導教官になる会議が、キルギス言語学科でありました。そこで、一混乱あったのです。

**ガリーナ** どんな問題があったのですか。

**伊藤** 当時は、キルギス国立総合大学のキルギス文学部は、名だたる著名な学者ぞろい、キルギス言語学の権威の学者が、多くいました。その会議で、年を老いた権威の先生が、私を彼の大学院生にしたいという議論がおこりました。それで、結論から言いますと、最終的には、ムサエフ先生に決まったのですが、その権威の先生は、後から、私に、ペテルブルグ大学を卒業して日本語研究に大いに功績を残した、エフゲニー・ポリワノフ博士の書物を研究したまえとアドバイスしてくれました。よかったら、時々我が家に来て、私が教えてあげようと言われました。私が、ムサエフ先生にそのことを告げると、君を助けてくれる人には、どんどん教えてもらいなさいと言われました。

**ガリーナ** ポリワノフについて聞いたことがあります。詳しくないので、彼のことを少し話してくださいませんか。

**伊藤** ポリワノフ博士は、戦前1910年代、3回日本に行って日本語を研究された人です。主に日本の5つの土地を選び、方言の研究をしています。

日本語の起源関係の研究をしている学者で彼の名を知らない人は、まずないでしょう。彼は、日本だけでなく、マレー語や東南アジア、中央アジアの言語にも多大な功績を残しております。ポリワノフ博士は、1930年代キルギスの首都フルンゼでも2年ほど大学で、教鞭をとられております。

**ガリーナ** 不思議な縁ですね。

**伊藤** そうですね。ポリワノフ博士は、ロシアだけでなく、世界的な大学者です。その方が、キルギスに住まわれたとは、本当に不思議な縁があるのでしょうか。

**ガリーナ** ムサエフ先生が指導教官になってどんな指導を受けましたか。

**伊藤** 大学院合格後、すぐに10冊くらいチュルク語（トルコ語諸語）関係の研究の本を私に渡されました。それを読んで、研究しなさいとご指導をいただきました。

**ガリーナ** その本は、全部読まれたのですか。

**伊藤** 実は、ぱらぱらとめくったくらいで、ほとんど読まずに、半年後にありがとうございますといって先生に戻しました。

**ガリーナ** 難しかったのですか。

**伊藤** 難しいということもあったのですが、その頃、教材を執筆していたり、通訳・翻訳の仕事もあったり大変忙しかったのです。ただ、先生からお借りしました何冊かは、本屋で、見つけて購入したり、図書館で借りて、コピーしたりして読みました。

最初、大学院入学の時、仮の論文テーマを「キルギス語—日本語語彙・文法比較研究」とムサエフ先生に与えてもらいましたが、どうも、流れるにだんだん日本の起源にも踏み込む感じになってきて、しかもキルギス語だけでなく、カザフ語、ウズベク語などの中央アジアの言語、さらにアラビア語、ペルシャ語などの言語も知らなくてはいけないという状況になってきました。

**ガリーナ** それで、勉強されたのですか。

**伊藤** 幸い、キルギスにウズベキスタンから移住されたゼビ・ムサバエフ先生にウイグル語、ウズベク語を習い、キルギス・ロシアスラブ大学のマラハット・マメドワ先生にペルシャ語を、その他、タジク語、トルコ語なども先生について学習しました。今も、例えば、ウイグル語のアラビア文字は、読み書きできますし、話せます。その他の言語もそれなりの知識は残っております。ただ、当時から私の妻は、マイナーな言語を勉強するより、英語に力を入れたらと私に言っていました。

なかなか学位論文は、思うように仕上がっていませんでしたが、その間、日本語教材、アルタイ語族に関する論文を多く書きました。そして、2002年にPh.D.を取得しました。テーマは、「キルギス語・日本語の文法比較一体言」です。

**ガリーナ** 素晴らしいですね！伊藤先生の研究から何か少し教えてください。

**伊藤** 研究とは、関係ありませんが、言葉で、面白いと思ったことがあります。日本では、一昔前は、私の出身地の名古屋では、結婚式に必ず「鯛のおかしら」を食膳に出す習慣がありました。名古屋の年配の人たちは、「鯛のおかしら」がないとどうも物足りないと感じていました。その「たい」ですが、キルギスの結婚式にも登場します。キルギスの「タイ」は、馬です。大勢のお客さんに肉を振舞います。また、日本では、「鯉」という魚がありますが、キルギスでは、羊のことをキルギス語で「コイ」と言います。

**ガリーナ** 不思議ですね。他にも、言葉で似ていることは、ありますか。

**伊藤** いっぱいあります。今話題になっている北方領土の4島の名前は、語呂合わせになってしまうかもしれませんが、キルギス語に似ています。私は、冗談で、昔はキルギス人が千島列島に住んでいたと言っています。まんざら冗談でもない気もしてきました。

私は、言語を専門としていますので、それに関してほんの少しお話をさせていたきたいと思います。

まずは、音（おん）からです。今、日本の母音は 5 つですが、研究によりますと奈良時代までは、8 つあったそうです。8 つは、キルギス語をはじめとするアルタイ語系の母音調和と同じ調和を持っているとのこと。私は、論文で、本居宣長の「古事記伝」の研究から始まって日本語の音の変遷の研究を執筆したことがあります。

**ガリーナ** 文法に関しても似ていると言われますが、何か面白い例はありますか。

**伊藤** 人によって面白いかどうかは、違いますが、例えば、「みる」という動詞は、英語は、ルック (look)、シー (see) または、ウォッチ (watch) ですね、それが、食べてみる、やってみる、話してみるのように補助動詞になった場合は、「みる」は、英語でトライ (try) に訳されます。日本語では、挑戦するという意味になりますが、キルギス語でもその意味が変わってしまいます。そのほか、日本語の「おく」、「いる」なども補助動詞になると意味が、変わりますが、キルギス語も同じように日本語と同じ意味になります。

それと日本語についてひとつ話しますと、日本語も時代と一緒に言葉が失われたり、意味も変わったりしてきます。これは、ある先生が日本語の講義で話されたことですが、例えば、竹取物語で、主人公の姫が見つつけられた時の文章ですが、「いとうつくしうてゐたり」というくだりがあります。

まず、「いと」という言葉は、今は、使われていません。「とても」とか「ひじょうに」という意味です。「うつくしう」は、現代で使われる「美しい」ではなく、「小さくてかわいい」という意味です。「ゐたり」の「いる」は、「存在する」という意味ではなく、「座っている」という意味です。ですから、前述した文の意味は、「とてもかわいく座っていた」となります。

**ガリーナ** 面白いですね。ところで、伊藤先生の教え子もそういう研究をされているのでしょうか。

**伊藤** いいえ、キルギスの大学院で教えた学生は、そこまで研究は達せずにはマスター号を修得して卒業したり、経済的に難しくやめたりしてしまう院生も多くいます。日本語の実力のあるものは、日本の大学院に入学し、日本で、研究しています。



**ガリーナ** やっぱりキルギスでは日本語や日本語教育の研究をする人を育成する環境や状況が整っていないですね。ところで、伊藤先生はキルギスで、25年を過ごされ、どんなお気持ちですか。

**伊藤** 長かったとか、あつという間という感覚はありません。ただ、毎日が、いろんなことがあり、問題が起きるたびに解決していきました。何度か日本へ戻ろうかなと思ったこともありましたが、残された課題を解決してから、あれをやりきったらと、やっているうちに25年たちました。

25年間のキルギスでの教育活動は、恩師、先輩、友人、親戚を始め、それは、数え切れない人たちの暖かい励まし、お世話をうけて、頑張ることができました。キルギスでの研究面では、筑波大学教授の臼山利信先生、四国学院大学教授の吉田世津子先生に大きな影響を受けました。

キルギスでの生活や学術面では、指導教官のシルトバイ・ムサエフ先生、ビシュケク人文大学のアブディルダ・ムサエフ学長、現外務省アバズベク・アタハーノフ先生、キルギス国立大学エミール・カニメトフ副学長には、ひとかたならぬお世話になっております。この場で、御礼の辞を述べたいと思います。

私は、これより新たに精進を重ね、教育、研究など多岐にわたり、頑張っていきます。後進の教育者、研究者を育てて行くことが、私を応援していただきました多くの方々への恩返しであると思います。

---

## 第三章 ロシア、日本そしてキルギスを語る

### ロシアについて

**伊藤** 第一章、第二章で、お互いの研究や日本語教育分野について対話を進めてきましたが、この章では、ロシア、日本、キルギスに関しまして、生活や文化、芸術などのことを話題として対話を進めていけたらと思っています。ガリーナ先生は、キルギスに移り住み長くなりますが、1991年にソ連邦からキルギスが独立宣言して、独立国になった時どんな思いでしたか。

**ガリーナ** ソ連の崩壊の前に前ソ連国民投票がありました。そのとき「ソ連を守ることが必要だ」という意見に賛成した国民の人数が圧倒的に多かったです。それにもかかわらず、突然ソ連が崩壊してしまってみんなショックでした。大きい国の国民だったソ連国民の多くは、突然小さい国の国民になりました。キルギス国民になった私は、ロシアに住んでいた両親と会うためにロシアに行くとき外国人登録をする必要が出てきて気持ちがとても悪かったです。さらにソ連が崩壊してからすべての旧ソ連の国々の経済状態が悪化して、物価が数倍高くなって、給料が足りなくなって苦しかったです。

**伊藤** 1991年キルギスが独立国になり、ロシア系の人の多くが、ロシアに移住しました。おそらく、ガリーナ先生のお友だちも多く移住したと思いますが、ガリーナ先生は、ロシアに行こうと真剣に考えたことがありますか。

**ガリーナ** ロシア系のほとんどの友だちはロシアに行ってしまいました。私は主人と相談してロシアに移住しないことにしました。キルギスでの生活に慣れていて、いい仕事に就いていました。そしてキルギスの経済状態が良くなると信じていましたから。

**伊藤** そうでしたか。キルギスに残られたことで、今日のキルギスの日本語教育の大黒柱の一人となられたのですね。ところで、ガリーナ先生のお生まれになったロシアのお話をお聞きしたいと思います。ロシアに対しては、ロシア人は、強い思いがおりでしょうね。

**ガリーナ** 私は、ロシアで生まれ育って、学校と大学を卒業して、ずっと離れても、ロシアは私の母国です。ですから私は、ロシアのことについてお話をすると、長い話になってしまいます。ロシアの文学、歴史にとっても関心があります。好きな作家はプーシキン、レールモントフ、トルストイ、トゥルゲーネフ、チェーホフなどです。ロシアの音楽、オペラ、バレエ、映画、絵画、ドラマ劇場など何でもとても興味を持っています。作曲家の中でチャイコフスキー、リムスキー・コルサコフ、ラフマニノフなどが好きです。特に好きなのはチャイコフスキーの第六交響曲です。子供のころ音楽学校を卒業しました。もうピアノがひけなくなりましたが、習った音楽理論や音楽の歴史のおかげで知識が広くなりました。

**伊藤** 私もロシア文学をよく読みました。日本語の翻訳版です。ロシア文学は哲学的です。難しい内容が多かったのですが、一回読みおえますとそれぞれの本にはそれぞれの味があり、ずっと記憶に残る作品ばかりです。また、ガリーナ先生は、いろいろ経験されていますね。ピアノ学校を卒業されているとのこと。ソ連時代、一般普通教育とピアノ学校と両立で、勉強されていたのですね。ところで、何かの雑誌で読んだのですが、ピアノを習うことは、子供の情操教育にとってもいいとありました。ガリーナ先生の頭の良さは、ピアノ教育からの影響もあるかと思えます。芸術にもご興味があると伺っております。

**ガリーナ** はい。ロシアの芸術は、世界的なレベルです。キルギスエネルゴで働いたときモスクワに出張すると毎晩劇場に行きました。そのときボリショイ劇場で偉大なバレリーナ、マイヤ・プリセツカヤの踊りを見て、他の劇場で偉大なインノケンティー・スモクトゥノフスキー、アンドレイ・ミロノフ、オレグ・ボリソフなどの俳優を見ました。

思い出しますが、子供のときモスクワの赤の広場に初めて出たとき、胸をどきどきさせながらクレムリンや立派な聖ワシリイ大聖堂を見ました。ソ連時代に両親は必ず子供をモスクワに連れて一緒に見物しました。ところが、ソ連が崩壊した後の2000年代に私はキルギス日本センターの

日本語の授業で文法の練習として、大人の学習者たちに「モスクワに行ったことがありますか」と聞いてみたら、みんな「ありません」と答えました。そのとき私は苦い気持ちでした。私の世代と比べたら、若い世代の世界を見る可能性が少なくなったからです。

**伊藤** 日本人の中でも、ロシア文学に興味を持つ人は多いですし、バレエや音楽を習いにロシアに留学する人も多いです。ロシアは、芸術・文化分野でも大国です。かつては、キルギスは、ソ連邦の15共和国のひとつでしたので、ソ連邦時代は、キルギス人でロシアで学んだ人も多かったと聞いています。ところで、ガリーナ先生がロシアで一番気に入られている都市は、どこでしょうか。教えてください。

**ガリーナ** ロシアの町の中でサンクト・ペテルブルグが一番好きです。18歳のときレニングラードに行ってエルミターージュだけを7日間朝から晩まで見ていました。非常に大きくて立派な博物館です。サンクト・ペテルブルグの郊外にも立派な宮殿と公園があってそれにも行きました。ところで、モスクワも大好きです。

**伊藤** 私もサンクト・ペテルブルグには、何度か訪れています。本当に美しい町並みでした。もう20年近く訪れていませんので、かなり概観が変わったことと思います。

**ガリーナ** 一度日本からモスクワ経由でキルギスに戻ったとき天気がとてもよくて、東京からモスクワまで行くとき飛行機から全ロシアを見ました。シベリアの広いタイガ、大きいレナ川、エニセイ川、オビ川、ウラル山脈を見ることができました。地図を見てロシアは広いということがわかっていましたが、実際にその広さを見て感激しました。

**伊藤** 本当にロシアは、広いですね。かなり前から実感しています。私が初めてロシアに行きましたのは、学生時代の1987年の春です。東京からモスクワへ飛んだのですが、とても飛行時間が長くて、疲れました。それとは別に思い出しましたが、実は、私は、あるロシア関係の旅行会社の添乗員を何回かしたことがあります。ウラジオストクからモスクワまでシベリア鉄道に乗って確か8日間で、モスクワに行きました。ずっと乗り続けると7日間だと思いますが、私のツアーは、いつも1日イルクーツク市で一泊して、その一泊の間にバイカル湖に行くという企画

でした。ところで、ガリーナ先生が生まれたイルクーツク市、もしくは、バイカル湖について、何か思い出、エピソードがあれば教えてください。

**ガリーナ** 確かに私はイルクーツク市で生まれました。そこに父が勤めていましたから。しかし、2歳のときからイルクーツクから離れて、何の思い出もありませんでした。大人になって、いつか生まれたところに行けるかと時々考えました。おかげさまで20代のときキルギスエネルギーから2回イルクーツク市にあるイルクーツクエネルギーに出張することになりました。1回目は秋で、フルンゼ市はまだ夏のような天気でしたが、イルクーツクはとても寒かったです。寒さに負けず週末にイルクーツクから少し離れたバイカル湖に行って、そこで船に乗って、遊覧して、広い湖、その透明な水、森林に覆われた周りの山々を見て、感動しました。さらに珍しいことに、バイカル湖から始まるアンガラ川の広いソースを船から見ました。そして湖岸にある立派な湖沼博物館を見ることができました。2回目は夏でした。飛行機でイルクーツクに行くとき偶然大雨のせいでバイカル湖の南にあるウラン・ウデという町に着陸して、待たなければなりませんでした。それは面倒くさかったのですが、雨がやむとバイカル湖に流入するセレンガ川とバイカル湖を空から見ることで非常にきれいで感動的でした。

**伊藤** 私がバイカル湖で思い出しますのは、日本の旅行者と一緒にバイカル湖の遊覧をした時です。水夫が、バイカル湖の水は、きれいだから飲んでみよう、綱に結び付けてあったバケツをバイカルに投げ、その水をバケツですくって水夫は、飲みました。私たちにも差し出されました。お客さんが飲んだので、添乗員の私も飲まなければと思い、私も恐る恐る飲んだのですが、腹下しにならなくてよかったです。まだ、25、26年前だったので、大丈夫だったかもしれませんが、今はもう水質がよくないと聞いています。ところで、バイカルという言葉は、チュルク語（トルコ諸語）からの由来であると言われています。ちなみに、キルギス語で、バイカルは、「豊かな湖」という意味です。少し横道にそれてしまい、申し訳ありません。続けてお話しください。

**ガリーナ** イルクーツク市は、広いアンガラ川の両川岸にきれいに伸びている古い歴史を持つ町です。そこにロシアの皇帝によってシベリアに流刑された、デカブリストの乱の参加者が住んでいました。そしてそのときは大黒屋光太夫の話はまだ知らなかったのですが、イルクーツク

は大黒屋光太夫ともかかわりのある場所です。日本人の大黒屋光太夫たちが 1782 年に伊勢国から江戸へ向かって出航して暴風に会って漂流しました。7ヶ月あまりの漂流の後、ロシアの極東の島に到着しました。その後様々な困難に遭いながらカムチャツカ、オホーツク、ヤクーツクを経由して 1789 年にイルクーツクに至りました。1791 年にサンクト・ペテルブルグに向かって、そこで女帝エカテリーナ二世に謁見して、帰国を許されました。大黒屋光太夫たちの冒険についての『おろしや国酔夢譚』という映画を見て、とても感激しました。イルクーツクもその映画の場面になりました。井上靖による小説を原作とした 1992 年公開の日本・ロシアの映画で、ロシアと日本の偉大な俳優が出ています。驚いたことに日本にも、ロシアにも、キルギスにも知り合いの誰一人その映画のことを知っている人がいなかったのです、私はとても残念でした。

**伊藤** 私は、大黒屋光太夫を主人公とした映画の話は、知っております。主人公を演じたのは、緒方拳という有名な役者です。緒方拳さんは、テレビ番組収録のために、キルギスに 2 度来られております。1997 年のことです。私が、コーディネータをしました。短い間でしたが、大役者とお話できたことは、気持ちが高まりました。さてガリーナ先生、そろそろ日本についてご質問いたします。

## 日本について

**伊藤** ガリーナ先生は、日本通ですが、日本についてご関心があること、例えば、文学、歴史、伝統、スポーツ、食べ物など、何か日本にご関心のある分野を簡単にお話ください。

**ガリーナ** 日本の文学に興味を持っていて、主にロシア語に翻訳された小説を読みます。一番好きなのは紫式部による『源氏物語』、清少納言による『枕草子』です。そして、昔の物語、川端康成、芥川龍之介、大江健三郎、夏目漱石、安部公房、芭蕉、石川啄木、井原西鶴、村上春樹などの小説と詩を読みました。日本語では藤沢修平などの作家の作品や池澤夏樹の評論を読みました。

日本史や伝統にも興味を持って、できる限り日本の城、お寺、神社、祭りなどを見るようにしました。東京にある様々な博物館にもよく行き

ました。とても多くの日本人が東京の博物館に行くことに驚きました。何回も博物館に入るためにずっと外で並んで待っていました。浮世絵の展覧会などを見るのが好きです。劇場で歌舞伎、能、文楽、ミュージカルを見ました。

**伊藤** ガリーナ先生がお読みになられた作家ですが、日本人の中で有名な作家です。しかし、日本人は、ガリーナ先生がお読みになられたほど、読みきれていないと思います。また、ガリーナ先生は、日本史、伝統芸術に造詣が深く驚きました。ところで、日本のスポーツなどはどうでしょうか。

**ガリーナ** 日本のスポーツの試合は、日本に滞在したときテレビだけで見ました。主に相撲を見ました。私の好きな日本の大相撲の力士はモンゴル人の横綱朝青龍とエストニア人の大関把瑠都でした。野球は日本でとても人気がありますが、私は、見てみたらゲームのルールは複雑に感じて、インターネットでルールを読んでもわかりにくいと思って、そのゲームのファンになりませんでした。でも日本でプロ野球だけではなく、大学・高校の野球の大会などもあって、若い世代にとってとてもいいことです。そして現在フィギュアスケートをしている日本の選手羽生結弦は人気があります。とても才能がある選手で、私も彼のファンです。

**伊藤** スポーツにもご関心をお持ちですね。野球ですが、あれは、実際やってみないとなかなか覚えられないスポーツです。私の子供の頃は、近所の子供が集まってやっていました。私が、24、25歳の頃、よくロシア人の通訳をしました。時々、野球観戦をすることもりましたが、ルールをいちいち説明するのは大変でした。いつも試合の途中で、球場を出ました。それでは、日本食はいかがですか。お口に合いますか。

**ガリーナ** 私は日本の食べ物が大好きです。お寿司や刺身やお好み焼きやしゃぶしゃぶや天ぷらなどです。実は日本食に関する面白いエピソードがありました。ある日、日本人の先生と一緒に石川県金沢市のレストランで刺身を注文しました。刺身は一匹の魚から作られていて、魚の頭も、尻尾も皿にありました。味わうと新鮮でとても美味しい魚でした。先生は、私をもっと喜ばせるように魚の新鮮さを強調するために「見てください、魚はフィンを動かしていますよ」とおっしゃいました。その瞬間、私はショックを受けました。まだ生きていた魚の目が、私を見て

いたので、私は、すぐに頭を下げて、目を下にしました。食べられなくなり、「郷に入らば郷に従え」という諺を思い出して、先生に、悪い気持ちを与えないように「魚さん、許してください」と謝り、それから食べ続けました。

**伊藤** ガリーナ先生は、刺身にも挑戦されたのですね。ところで、日本人は、外国の異文化に触れるとカルチャーショックを受ける人が多いのですが、ガリーナ先生は、日本に行かれてカルチャーショックを受けられたのでしょうか。もしおありでしたら、教えてほしいのですが。

**ガリーナ** そうですね。カルチャーショックを受けたことがあります。その中で、日本での体験を通して、いい部分とよくないところを文章としてお持ちしました。お読みください。まずは、よい面です。テーマは、「日本人の親切さ」です。

「外国の中で、私にとって日本こそが、素晴らしくて住みやすい国です。ひとつの理由は、私は、日本語がわかるので、人々とのコミュニケーションに問題がないことです。さらに、尊敬に値する日本人の責任感、親切さ、礼儀正しさです。ここである一日に起こった 3 つのエピソードを紹介したいと思います。

ある日、私は新幹線に乗って関西から東京に向かっていました。そして窓のそばに座っていた隣の女性と話をしたくて、彼女に声をかけました『この窓から富士山が見えるそうですね』。女性は明るく、私に『窓際の席を譲りましょうか』と言ってくださいました。私は最初に断りましたが、その後に感謝し、窓のそばに座ってカメラを準備しました。そのとき列車の車掌が車両を通過したので、隣の女性は、富士山はいつ見えるかと彼に尋ねました。車掌は時刻表を見て、時間を教えてくださいました。残念ながら、通るとき富士山は雲に包まれて、見えませんでした。しかしおかげさまで私と隣の女性は楽しいお話をすることができました。突然、同じ車掌が来て、曇天のせいで私たちが聖なる山を見ることができなかったことを私達に謝りました。彼も、JRも関係ない自然の現象だったにもかかわらず、このような礼儀は、心の温まることでした。

また、東京駅に到着して、新幹線から在来線に乗り換える前に私が持っていた乗車券のどれを機械に挿入するべきかと改札口で勤務中だったスタッフに尋ねました。彼が教えてくださってから私は改札口を出まし



た。ちょっと歩くと誰か私を追いかけてくるような音が聞こえました。『お客さん、これからの行き方をご存じですか。説明しましょうか』とそのスタッフが私に尋ねました。彼は私が乗車券に関する質問をしたため、目的の駅までの道順がわからないだろうと考えたようです。私は彼に感謝して道を知っていると答えました。またまるで周りは暖かくなったような感じでした。

そして、その日の楽しいことはまだ終わっていませんでした。目的の駅に到着し、パン屋によりました。入口には『今日は全品半額』と書いてありました。私はパンを選んで店員にお金を支払いました。パンの値段をはっきり覚えていませんでしたが、金額の100%払ったような感じでした。私はこれを気にせずに、広告の意味がわからなかっただろうと思いました。そしてどうしてか領収書をすぐもらわなかったことを気にしないでパン屋さんを出ました。暗い道を歩くと、また誰か私の後を走ってくる足の音が聞こえました。それは店員でした。彼はこう言いました『お客さん、あなた領収書を忘れました。私はその裏にスタンプを押して、あなたが支払った金額の半分を書き込みました。もしここ数日中に当店に来てくださったら、その領収書をお金の代わりに使ってパンを買うことができます』。

本当に幸福な1日でしたね。私はその日に数人の日本人たちのこのような親切な態度を経験しました。一見すると、このようなそれぞれのことは大したことではないですが、私にとって、仕事中だった日本人の礼儀、親切さ、尊敬の例でした。このような人々が日本の富と繁栄をもたらすと考えています。」

**伊藤** よくない面とは。

**ガリーナ** 電車とバスで受けたカルチャーショックについて、「日本の電車とバスで驚いたこと」です。

「日本では、電車やバスの中で席を譲ることはあまり見られません。私がはじめて日本に行ったとき、自分の国の習慣から見て、男性が女性に席を譲らないことに驚きました。ある日、電車に乗って空席がなくて、私はずっと一人の男性の前に立っていました。彼は足を広げて、2つの席を占めていました、そして後1つの席にかばんを置いていました。もっと驚いたのは電車の中で左手で赤ちゃん抱いて、右手で、そばに立つ

ていた 2 歳ぐらいの小さい子供の手を握っていた若い母親の前に 7 人の若い男女が座っていたことでした。みんな彼女と子供達を気にしていませんでした。そして何回も素早い動きの若者が年寄が座ろうとした席を先に占めたことも見ました。

私は、全世界で文化、伝統を守っている国、人々の親切で名高い国である日本ではどうして電車やバスの中でこのようなお互いの無関心があるのかと考えていました。知り合いの日本人に聞いたこともあります。しかし、だれも説明できませんでした。『以前譲っていましたが、その後少しずつ習慣が変わりました』という答えだけを聞かせてもらいました。そしてお年寄りや弱く思われることが嫌いなようですので、だれかが席を譲ろうとするとき座らないことにすることもあったと言われました。私の国の女の子は日本に到着してまもなく、電車の中であるおばあさんに席を譲ろうとしました。それに対しておばあさんは素っ気なく断りました。『私はまだ立つことができる』と答え、腰を下ろしませんでした。女の子はショックを受けて、別の車両に逃げてしまいました。私は日本の電車やバスの中で何回もお年寄りや子供連れの母親に席を譲りました。その際にたいていの場合最初に断って、その後『本当に座ってもいいですか』と聞いて、感謝して座りました。

ある日、私は立って、込んでいた電車に乗っていました。私の隣に 70 代のおばあさんが立っていました。私たちの前に 2 人の若い女性が座っていました。これらの女の子たちが同時に電車を降りて、私とおばあさんが隣に座りました。日本人は通常、電車の中で見知らぬ人に声をかけることはありませんが、おばあさんはずっと立ってとても疲れていたようで『座れてよかった』と私に言いました。『若い女性たちが早くおばあさんに席を譲れば、よかったのに』と私が言うと、おばあさんは、『私はもう仕事をしていないから、もう役に立たないです。それに対して、若い人々は仕事をしているので、疲れて休息する必要があります。もし誰か私に席を譲ってくれたら、ありがたいです、でも譲ってくれなくても怒りません』と言いました。おばあさんの答えは私を驚かせました。私は、『でも、彼女たちには母親がいるでしょう。もし彼女たちがあなたに席を譲ってくれたら、彼女たちの母親にも誰かが席を譲ってくれると考えるべきだと思います』と言ってもおばあさんは、私に同意してくれませんでした。

別のある日のことです。私は、日本人の先生方に伴い 10 か国からの日本語教師のグループの一員として、日本の学校を訪問しました。数人の

先生は、彼らの国の民族衣装を着てきました。学校で私たちは授業を見て、その後日本の武道、踊り、生け花、茶道などのレッスンも見せてもらいました。その後私たちは高校生と交流して、自分の国の話をしたり、質問に答えたり、意見交換をしたりしました。訪問が終わったとき、私たちはバス停に向かって行きました。バス停に到着したとき、そこに既に私たちと交流した高校生たちがいました。バスが来ると、高校生たちは先にバスに乗って、空席を占めて、残りの席に自分のかばんを置きました。私たち、日本人教師と外国人教師は立って乗るしかありませんでした。私たちは、学校のお客様だった教師たちへの態度に非常に驚きました。」

**伊藤** ガリーナ先生は、よく人の心の動きを観察されておりますね。ただ、これが、日本全体の傾向でないこともご理解ください。地方では、バス、電車など、ガリーナ先生のお国のように、譲り合う習慣は、残っています。一番恥ずかしいのは、譲っても断られることです。余談ですが、私は、いつも席を譲るようにしております。時々、混雑するバスに乗り込むと、人が私に席を譲るのです、何か私が、もういい年に思われているのかと想像すると寂しくなる時もあります。

**ガリーナ** 地方の日本人は年を取った人に席を譲ることはいいことですね。

**伊藤** ガリーナ先生は日本の地方にも行ったことがありますか。

**ガリーナ** ええ、長い間日本にいて、休日には日本を見るために旅行もしたことがあります。北海道、青森県、栃木県、長野県、福井県、石川県、大阪、京都、兵庫県、沖縄などに行きました。どちらも素晴らしくて印象的でした。しかし、残念なことに四国と九州へは行ったことがないです。

**伊藤** 四国と九州は、行かれていないのですね。ガリーナ先生でしたら、近い将来、行かれると思います。ところで、日本のイベントには、何か思い出はありますか。

**ガリーナ** ええ、あります。神戸ルミナリエ、青森のねぶた祭、浅草の三社祭、川越まつり、平塚の七夕まつり、靖国神社のみたままつりな

どを見ました。でも見ていない日本の行事は非常に多くて残念に思っています。実はキルギス日本センターで日本語を勉強したとき『ヤンさんと日本の人々』というビデオ教材も授業で使われていました。そのビデオにはいろいろなエピソードが入っていて、文法や語彙を習うことだけではなくて、日本事情、日本文化にも触れることができました。その中に「第九」というエピソードもありました。商店街の人々がベートーベンの「第九」の合唱に参加したことがテーマでした。そのビデオの合唱にとってもたくさんの方が参加しているのに驚きました。一般の日本人が時間をかけて活発に練習して、ドイツの作曲家による第九交響曲の合唱に参加することを不思議に思いました。

そして日本にいるとき、ある日二人の日本人のおばあさんと知り合いました。一人は年金生活者で、あと一人は看護婦でした。話の中で、二人は「私たちは昨日ベートーベンの『第九』の合唱に参加した」と教えてくださいました。私はその重要なイベントについて知らなくて、見ることができなかったことを今もとても残念に思っています。実はインターネットで大阪城ホールで一万人が「第九」を合唱しているのを見て、非常に感動しました。いつか実際に見るのが私の夢です。

私はロシア語ができる人に日本を紹介するために、日本についての話と写真をインターネットで公開しています (<http://www.japlang.ru/vorobyova/>)。その中に「第九」と日本人についての話もあります。それはいつか本にまとめたいです。

## キルギスについて

**伊藤** ガリーナ先生、おそらく、日本について、まだまだお話したらない分野もおありかと思いますが、このあたりで、キルギスについての質問をいたしたいと思います。ちなみに、キルギスでは、どのような分野にご興味が、おありですか。

**ガリーナ** キルギスの自然と文化に関心があります。実は、私はキルギス電力会社で働いていたときよく地方へ出張しました。それはタラス、ナリン、イシククリ、オシュ、ジャララバード地方でした。そのとき人の親切さ、きれいな自然に魅了されました。特にキルギスの宝になっているイシククリ湖は素晴らしいです。雪で覆われた白い山に囲まれた青

い湖を初めて見て、昔の有名なロシアの旅行家セミョーノフ・チャンシヤンスキーは「真珠で囲まれたエメラルドだ！」と叫んだそうです。またキルギス文化と触れる機会がありました。この9月にキルギスのイシククリ湖で、第2回ワールド・ノマド・ゲームズ（世界遊牧民競技大会）が開催されました。そのノマドゲームを興味深くテレビで見ました。きれいな広い谷に多くのユルタというフェルトの組み立ての家が並んでキルギスの地方からの人がキルギスの習慣・文化を紹介していました。

キルギスを代表している国の有名人である作家のチングス・アイトマトフ、オペラ歌手のプラト・ミンジルクエフ、映画監督のボロトベク・シャムシエフとトロムーシュ・オケーエフ、俳優のシュメイクル・チョクモロフ、ボロトベク・ベイシェナリエフ、バケン・クドゥケエフなどをとても大切にしています。若い世代の中で特にダンサーのアタイ・オムルザコフの活動に関心を持っています。彼の才能のおかげでもキルギス共和国は多くの国々で知られるようになってきています。

**伊藤** ガリーナ先生、キルギスについてもよく観察されておりますね。キルギスの文化人も精通されておられますね。キルギスにも才能のある芸術家、文化人は、ソ連時代には、たくさん輩出されました。ソ連教育のおかげだと言ってもいいでしょう。ところで、アタイ・オムルザコフは、いいですね。私の家族は、彼のファンです。

**ガリーナ** そろそろ私のほうから伊藤先生にご質問したいと思います。

**伊藤** ガリーナ先生に、知識のうえで、圧倒されておりますので、お手柔らかにお願いいたします。できましたらキルギス関係のご質問を少なめにいただければ、助かります。

**ガリーナ** それでは、キルギスの魅力をお聞かせください。

**伊藤** キルギスの魅力ですが、まずは、人だと思います。キルギスの人は、気のいい人たちです。キルギスに来た日本人は、みな、キルギスが好きになって日本へ帰っていきます。年配の人は、みな、キルギスは、昔の日本のような感じだといえます。私自身、子供のときの日本のような気がします。

私がキルギスに来た当初から、キルギスの人は、親切にしてくれます。ご飯をちゃんと食べているか、病気でないか。困ったことがあったら何でも遠慮なく言ってくれとよく言われました。今でも、元気で、やっているか、子供は、成長しているか、奥さんに宜しくなどと気にかけてくれます。

次に、大自然ではないでしょうか。大きな山に囲まれたキルギスの首都は、夏は、5月から緑に包まれます。夏は、イシククリという大きな湖で保養できます。冬は、スキーやスケートを楽しめます。気候も穏やかで、寒さもそれほど厳しくありません。

その次に、物価です。日本に比べれば、安いです。

レストラン、カフェで出される料理は、とてもおいしいです。

キルギスの人は、フレンドリーで、いろいろ親身に助けてくれます。日本人もそういうところはありますが、キルギスの人は、それ以上です。まだまだありますが、この位にしておきます。悪いところもありますが、それは、質問しないでください。

**ガリーナ** わかりました。では、伊藤先生が、キルギスに来た頃のカルチャーショックを教えてください。

**伊藤** カルチャーショックといいますが驚いたことを話したいと思います。キルギスに来た頃、いろいろなことに驚きました。それからもう25年たってしまっていますので、かつて驚いたことも、今ではもう忘れてしまっていることもあるかと思いますが、記憶に残っているものをあげたいと思います。

まず、キルギスに来て最初にお客さんに呼ばれていくと、最後に羊の頭が食膳に出されました。そして、目や耳を食べさせられました。せっかくなので、仕方なく食べましたが、ガリーナ先生のお刺身のお話の気持ちです。

次に、キルギスで有名な新聞があります。「夕刊ビシケク」紙です。日刊でした。キルギスに来て、一ヶ月くらいたった後、インタビューをされました。新聞を買いますと何と一面のトップに記事があり、驚きました。

**ガリーナ** 新聞に載った伊藤先生のインタビューはキルギスと日本国民の相互理解のために重要なことですね。ところで、他に驚かされたことがありましたか。

**伊藤** はい。キルギスの友だちなどが、よくお金を借りに来ました。あまり知らない人にも頼まれることがありましたが、貸さないと怒られたことが、何度かあります。どうして怒られるのか驚きました。

お金に関してですが、当時のキルギスの物価の安さは、驚きました。タクシーで 5 時間かかるところへ行きました。貸し切りで頼んだところ、何と日本円にして、1500 円くらいでした。私は車を運転していますが、現在 1 リットルキルギス通貨で 36 ソムですので、日本円で 53 円ぐらいではないでしょうか。25 年前当時は、もっと安かったのでしょう。

マンションの値段に話を移しますが、ご存知のように 1992 年からロシア系のキルギス住人は、ロシアに移住し始めました。その影響で、1LDK が日本円で 10 万円を切っており、3LDK が日本円で 20 万円しませんでした。今でも私の同僚たちは、当時いっぱい買ってあげばよかったのと言っています。独身時代はお金がなく、それに、外国人の私は買う権利がなかったので残念に思いません。

話はキルギスのパーティーに移しますが、キルギスでは、お祝いのパーティーでは、ロシア風にウオッカを飲みます。乾杯の言葉の前に、テーブル上におかれた小さなウオッカグラスにいっぱいウオッカが注がれます。乾杯の挨拶が終わるごとに、みなガラスをお互いにぶつけ合わせて飲みます。その後は、次の乾杯の挨拶までは、ウオッカは飲めません。日本では、好きな時にお互いに注いで飲みますが、ロシア風は、いっせいのせで同時に飲みます。これは、習慣なので、そういうものかと驚きもしませんでした。驚きましたのは、労働者のおじさんや普通のおばさん風の人が、素晴らしい感動的な言葉で乾杯の言葉を言うのです。キルギスの人は、詩心を持っていると驚きました。

**ガリーナ** 私もキルギスの地方に行ったときパーティーで聞いたみんなの挨拶の言葉が上手なことに驚きました。ところで、他には驚いたことがありましたか。

**伊藤** 他には、キルギスに来てからではなく、前のロシア留学の時に驚いたのですが、同じ学生寮に、男性たちの部屋と女子学生たちの部屋が混ざり合って、同じ建物に暮らしているのです。キルギスでも同じです。日本ですと、男子寮、女子寮と完全にセパレートされていますのでびっくりしました。

その他、私の記憶では、首都ビシケク市のデパートが 25 年前には、日曜日休みだったのです。それと、昔は、メガネをかけた若い人は見えませんでした。。

面白いかどうかわかりませんが、日本には、出世魚という言葉があります。同じ魚ですが、大きさによって名前が変わります。また、地方によっても出世魚の名前の呼び方が違うのです。キルギスに来てわかったのですが、キルギス人は、馬、牛、羊などの家畜は、年をおうごとに、呼び名が変わってきます。生活に密着しているものは、名前が変わってきます。

**ガリーナ** キルギス人と日本人は、外見が似ていますが、メンタリティーも類似点がありますか。

**伊藤** キルギスには、ある伝説があります。昔シベリアのエニセイ川の湖畔に、ある民族が住んでいました。ある日肉の好きなグループは、中央アジアの山に移住し、魚の好きなグループは、日本列島に移住したと。ですから、キルギス人は、日本人と親戚だといいます。

**ガリーナ** ちなみに、伊藤先生は、キルギスの女性と結婚しているのですね、キルギス人と親戚ですね。

**伊藤** そうですね。キルギスには、旧ソ連大使館で、16 年日本で働かれたイシェンバイ・アブドゥラザコフ先生がいらっしゃいました。天皇陛下から勲章をいただいた方でもあり、日本通で、ビシケク人文大学では、教授をされておりました。個人的には、私たちの結婚のお世話をしてくれました。その先生が、亡くなる数ヶ月前に、日本大使公邸で、スピーチされたことを思い出します。アブドゥラザコフ先生は、日本語も堪能でしたが、私が通訳をしました。先生は、日本とキルギスの関係を長く話されて、最後に日本人とキルギス人の結婚に触れたあと、日本人とキルギス人は、世界でも強い民族であると称えました。そして、その強い民族の間に生まれた子たちが将来どのように社会で活躍するのが楽しみであると話され、私をちらりと見ました。

**ガリーナ** アブドゥラザコフ先生は、キルギスと日本とのかわりに大きく貢献された人ですね。キルギスと日本での関係で面白いお話はありますか。



**伊藤** 8 世紀に書かれた日本書紀には、最初の天皇は、神武天皇で、即位した日は、2 月 11 日だと言われております。2 月 11 日は、建国記念日として祝日になっております。ところで、キルギス共和国では、2002 年に国のスローガンを「キルギス国家の年」として、国家形成 2200 年祭をお祝いしました。その元になったのは、中国の歴史書からですが、キルギス国家が形成されたと言われる日は、とても寒い時期であったと書かれており、時期的には、1 月末か 2 月初めだと言われております。

そういう意味では、日本とキルギスの国のできた日が近いので不思議です。ちなみに私の母は、1940 年 2 月 11 日生まれです、亡き祖母が言うには、母が男の子だったら、建国 2600 年記念で国から贈り物がもらえたのにとっても残念だと話したのを思い出しました。

**ガリーナ** お母様のご長寿をお祈りいたします。

**伊藤** ありがとうございます。

**ガリーナ** さて、質問を変えますが、私は全てのアイトマートフ氏の本を読みました。好きなのは前期の小説でした。それは「ジャミリヤ」、「最初の教師」、「早春の鶴」、「さらば、グリサル」、「母なる大地」、「白い汽船」、「一世紀より長い一日」などでした。しかし後期の小説「処刑台」、「カッサンドラの烙印」、「キルギスの雪豹」はそんなに馴染みがありませんでした。伊藤先生もアイトマートフ氏の作品に魅了されたとおっしゃいましたので、アイトマートフ氏の作品についての感想をお願いします。

**伊藤** 私は、アイトマートフ氏の作品は、日本語で 13 作品、ロシア語では 5 作品を読みました。日本語版では、訳者が何人もいる作品があり、題名も違っているものもあります。アイトマートフ氏の作品には、鋭い洞察力があります。自然、人間の心の動き、善と悪を大胆に表現しております。また、宗教や麻薬の問題にも踏み込んだ作品もあります。悲劇で終わる作品も多いです。ガリーナ先生もお感じになられたと思いますが、アイトマートフ氏の作品は、愛を描いております。男女の愛、家族の愛、自然への愛、禁じられた愛。そこに、何かの運命が、迫ってきます。私は、何ともいえない作者のロマンスを感じます。ちなみに、アイトマートフ氏の作品の日本語訳には、私たちが紹介した本以外に「一世紀より長い一日」「チンギスハンの白い雲」、「いとしのタパリョーク」など有名な小説が多くあります。

**ガリーナ** 伊藤先生は、個人的にもアイトマートフ氏とよくお付き合いがあったと聞いています。

**伊藤** 私は、個人的には、アイトマートフ氏に仲良くしていただきました。私の師匠が、アイトマートフ氏の親友であったことも大きく影響したと思います。ご存命の時には、時々ご自宅へ呼んでいただきました。最後にお会いしたのは、2007年の10月です。亡くなられる8ヶ月前でした。ガリーナ先生ともっと早く親しくなっていたら、私は、アイトマートフ氏に、ロシア人女性でアイトマートフ先生の大ファンがいますので、ぜひお会いになってくださいと頼むことができましたのに、とても残念です。

**ガリーナ** 実は、一度チングス・アイトマートフ氏に会ったことがあります。チングス・アイトマートフ氏が50歳になったとき、オペラ劇場で行った彼のお祝いの催しに、主人と一緒に参加しました。催しが終わったら運よく劇場のロビーでアイトマートフ氏に偶然お会いして、彼の本にサインをお願いしました。アイトマートフ氏はサインをしてくださって、主人にボールペンを返すとき主人の目を数秒見ました。そのときのアイトマートフ氏の目を今も覚えています。まるで主人のすべての人生、心がその数秒でわかったような感じでした。

伊藤先生、最後に何か私たちにメッセージをお願いいたします。

**伊藤** メッセージと言われますと困惑しますので、今回の対談を通して感じましたこと、決意したことを述べたいと思います。

ガリーナ先生とは、今回の対談を通して親くなりました。それまでは、ほとんど交流がありませんでした。対談までは、上品なやさしい女性、聡明な人で努力家というぼんやりした印象を持っておりました。日本で博士号を取得されたという情報も得ておりました。

そして、今回実際ガリーナ先生の業績を見聞きするにつけて、とても大きな実力者であると感じました。この対談を進めていくにつれ、普段は、忘れていたかつての記憶を呼び起こすこともできました。今回の対談で語れたこと、語ることをしなかったすべてのことが、生き生きとよみがえりました。今思えば、そんなことがよくできたなというエピソードも出てきました。すべて、ガリーナ先生のおかげです。今後も立場は違っても、これからは先生と力を合わせて、日本語教育の発展に貢献できればと願っております。

最後に、読者の皆様方には、私たちの対談をお読みいただきまして心より御礼申し上げます。今後の皆様方のご多幸をお祈りいたします。ガリーナ先生、ありがとうございました。

**ガリーナ** こちらこそ、ありがとうございます。私も対談のおかげで伊藤先生の活動についてたくさんの新しい情報を得ることができました。この本の公開の意義について以下のように考えています。私たちは、この対話を通じて、キルギスの日本語教育に携わる人として自分の経験を通して、過ぎ去った 25 年の時期を振り返ってみました。一滴の水に世界が反映されるように私たちは自分の人生の歩みを通してキルギスの日本語教育、日本語教育研究の歴史を示してみました。キルギスの日本語教育の成長、私たちの歩みに触れた読者の中で一人でも新しい活動をはじめると幸いです。今後ともキルギスの日本語教育とキルギスの日本語教育研究の将来と発展のために頑張りましょう。

---

---

付録 教え子から

忘れられない出会い

ジャクシルク・アクマタリエフ  
東京外国語大学国際化拠点室 非常勤職員  
学術博士

誰でも、人生の中で1つや2つの忘れられない出会いがあると思います。私の場合は、ちょうど日本語を学び始めた大学1年の時でした。ソ連が崩壊し、キルギスが独立。ソ連という大国の崩壊が、皮肉にも海外との自由な交流を促進させるきっかけになったのです。そうはいつても、当時、中央アジアのキルギスに喜んで来てくれるような外国人はいません。もちろん、日本人が来ることなど、想像もできない時代です。当然、日本語を学ぶなんてもってのほかでした。家族には「日本語を勉強して何の役に立つの？」といつも言われていました。日本は遠いし、日本に行けるわけでもないし、そもそも日本語を勉強して食べていけるのか？という単純な疑問を、家族は持っていたのだと思います。当時のキルギスの国情を考えると、やむをえない時代だったのです。

そんな時、日本から先生が来るという噂が学生の間に広まりました。私は、日本人ってどんな顔や体形をしているんだろう？服や持ち物は？テーブルじゃない日本人が話す生の日本語とはどんなものなんだろう、といろいろと想像をめぐらしワクワクしたことを思い出します。そうしたら、本当に日本人の先生が来てくれたのです。それが伊藤広宣先生でした。私が最初に感じた、日本人（伊藤先生ですが）の第一印象は、キルギス人に似ているようで似ていない！そして、最も印象的だったのは、先生の真っ白な手です。白くてふわふわしているあのような手を持つ男性は、キルギスにはいません。こんなに白い手があるの？と思うぐらい真っ白な手に驚きました。あの時の光景と感触は、今もしっかりと記憶の中に残っています。

当時は、日本語で書かれた教科書はほとんどなく、伊藤先生が黒板に書く平仮名が貴重な日本語でした。その平仮名の書き順を丁寧に教えて

くださり、私もその通り覚えました。先生の教え方だと、なぜかすぐに頭に入る。すぐに覚えられるというような不思議なものでした。おかげさまで、私は次第に日本語が好きになり、日本語に興味がわいてきました。

そして、数年後、私は大学を卒業し、すぐ大学一年生の日本語の講師になりました。当時の日本語学科の学科長は、伊藤先生でした。先生と一緒に働くことになったのです。このことは、私を大きく成長させました。あの時は、毎日が大変でしたが、とても充実していました。何よりも先生の仕事への姿勢を隣で見られたことで、普段感じることの出来ない生徒のことを第一に思い厳しく指導してくださる姿に感銘を受けたのを昨日のように覚えています。人を指導するという仕事を志していた私にとって、大きな収穫となったのはいうまでもありません。また、社会で働くことはどういうことなのか、仲間と一緒に行動するとはどんなことなのか、というような社会とのかかわり、人間関係の築き方などを、具体的に丁寧に教わりました。今、その当時は振り返り、私が社会人になって先生が教えてくれたことは、主に次の「3つの力」だと考えます。

### 【前に踏み出す力】

学生の時は、授業料を払って先生に教えてもらいます。それをどう理解し、こなすかが、学生のルーティンワークになっています。しかし、社会人は会社から給料をもらいます。社会人になったら教わるのではなく、自分で学び、覚える姿勢が大事になってきます。相手から与えてもらうのを待つのではなく、自分から相手に踏み込み何かをしていく努力が必要なのです。そして、なによりも「責任」が、大きく伴ってきます。その責任というものが、「賃金」や「自由」と表裏一体であることを気づかせてくれたのも伊藤先生です。

それと、社会に出て仕事をしていると、やりがいというものを忘れ、ただ漠然と仕事をこなすようになりがちです。しかし、本当は一步先の未来を見ながら与えられた仕事のその先を見据えることが、たとえ単純な仕事でも大きな意味を持つてくるのだと理解しました。これは、先生が常日頃、「自分の目標をたてそれに向かって少しずつ日々努力することが大事だ」と、おっしゃってくれたからこそわかったことでした。この言葉は、今も心に刻まれています。

だからこそ、私は日本語の講師でありながら、毎年、日本語能力試験を受けたり、いろいろな日本へ行ける留学プログラムなどに参加したり

して、常に自分の日本語の能力を高めることに努力してきました。その過程で、教えるということは、その何倍も勉強しなくてはいけないということに気づいたのも、この時期でした。これらは常に先生の働き方、仕事への姿勢を間近で見っていたからだと思います。

### 【チームで行動する力】

二つ目は、協調してやり遂げる力です。学生時代は、個人の努力で自分の能力を伸ばせば済みます。チームで一つのプロジェクトを行うということは、ありません。でも、社会人になって、個人で行動することはもちろんですが、グループで行動することも多くあります。日本語学科では、伊藤先生のチームを団結させる力が素晴らしく、そのおかげで皆が一つの目標に向かって行動することができました。

キルギスの場合、同僚の誕生日会があったり、結婚式があったり、子供が生まれたり、親戚が亡くなったりした時は、キルギス人たちは必ず参加します。キルギス人にとって人生に関するイベントは社会的にとっても重要な事です。そのようなキルギスの社会にどう関わっていくかが、実は予想もしていなかったような信頼関係を築くことになるのです。

伊藤先生は、そのことをちゃんとわかっていて、これらの行事に必ず参加していました。今思うと、先生がキルギス人と一緒に喜び、一緒に悲しむことで、その空間や感情を共有しようとしていたのだと思います。普通の日本人には、なかなかまねできないことです。現在、私は日本人と結婚し、日本の社会に暮らしています。しかし、私の主人も含め、多くの日本人は、伊藤先生のように、キルギス人のイベントなどに参加することをそう簡単には理解できません。そして、私も日本の社会のあり方を、まだ十分に理解しているとは言えません。先生の一番尊敬できることは、何も知らないキルギスの社会に飛び込んだことです。これは勇気のいることです。そして、キルギス人の価値観、キルギスの伝統などを尊重し、心から接してくれたのです。日本のことわざに「郷に入れば郷に従え」というのがありますが、先生はまさにこのことわざ通りに実践していました。そのような不断の努力が、結果的にキルギス人をまとめ上げる原動力になっていたのだと思います。現在、私は日本に住んでいます。このことを実践しようと心がけています。

### 【考え抜く力、自分の意見を述べる力】

三つ目は、生きる上でとても重要なことです。それは、「考える力」です。人は、深く物事を考え、時には自分を見つめ、社会を見つめること

で、冷静になれますし、問題も解決できます。また、明るい希望も持てます。しかし、それはちょっと考えた程度では、生まれてきません。考え抜く、考え続ける力が重要なのです。これは伊藤先生を代表とする日本人が持つ素晴らしい特徴です。考えるということは、自分の意見が整理でき、問題点をあぶり出し次のステップが見えてくるということです。しかし、多くの人は、そもそも考えることができません。それは、忙しかったり、疲れたり様々な理由がありますが、実はそんなに考え抜かなくてもなんとなく生きていけるからだと思います。考えるということは、自分の意見を持つということです。これは、とっても大切なことです。得てして、人間は他人の意見に流されがちです。権力者の演説や発言に、民衆が熱狂的に支持する光景を人類は何度も見てきています。物事に流されないためには、「考える」ということは重要なことなのです。先生から、私は「考え、自分の意見を述べる」ということを学びました。そのためには、どうやって整理し、自分の意見を出せるのか、また相手を納得させられるのか、という技術的な部分も教わりました。たとえば、相手の話をよく聞いて何を言いたいのかを整理することや感情論をあらわにして語らないことや落ち着いて話すことなどです。

当時の日本語学科では会議が多く、四六時中、自分の意見を述べる、ある問題について議論する事を行っていました。そこでは、伊藤先生は必ず皆の意見を丁寧に聞いて、議論を進めていました。このようなことを繰り返すことによって、次第に大勢の前で「自分の意見を述べる力」を身につけていったのだと思います。そもそも人前で話すということは、じっくり考え抜かれたものでなければなりません、そんなことも学べた時期でした。

もちろん、伊藤先生に教わったことはこの3つだけではありません。先生には、数多くのことを学びました。それらは、全て今につながっています。キルギスの片田舎で生まれ育った私は、日本に来ることができ、これだけでも夢のようなことですが、今はそこで終わろうとは思っていません。もっと先を見つめています。それは、日本でキルギスのことをもっとわかってもらうことです。先生がキルギスで日本のことを教えてきたように、私が日本でキルギスのことを広めていけば、両国にとって明るい未来を意味します。そうなれば、次は私の子供が何かをするかもしれないし、子供の友達が何かをするかもしれない。そうやって人々の出会いを作り続けていくことが、実は一番重要だということを先生との出会いを通じて気づいたのだと、今、私は確信しています。

あれから 25 年の歳月が過ぎようとしています。

先生に教えていただいたことを活かして、これからも頑張って参りますが、まだまだ未熟な私です。引き続きご指導をいただけるのなら、この上無い喜びです。

キルギスに帰る度、いつも先生のお顔を拝見したいと思っております。その時には、先生に褒めていただける様な、立派な社会人になっていることが、先生へのご恩返しかと思っております。

最後になりましたが、今後もお元気で、益々ご活躍なさることをお祈り致しております。

伊藤先生、本当に有り難うございました。



## 達成人

ハサノワ・ナイリヤ  
医学博士、翻訳者  
米国から

日本語が世界で難しい言語の一つで、自分がいつかそれに挑戦するとは思っていませんでした。キルギス国立医科大学の5年生のとき一人の同級生に、キルギス日本センターが主催した日本語のビデオコースに誘われ、ビデオを通して日本の文化や習慣に触れることで日本語を学ぶ強い希望を持つようになりました。

お蔭で、日本語初級講座に受かり、授業が始まりました。その時にヴォロビヨワ・ガリーナ先生と出会いました。はじめは、厳しそうな先生に見えましたが、先生の冷静で心が和むような声のはっきりした説明を聞きながら文法や漢字の勉強がスムーズに進みました。

一番難しく思うのは漢字でしたが、ガリーナ先生が作って下さった物語のお蔭で漢字がずっと頭に入って行って、記憶しやすかったために、漢字を暗記する苦労はありませんでした。それは、各漢字の偏や旁の論理的な説明の上にストーリーの連想があったからだと思います。それに、ガリーナ先生による分かりにくい文法の所のちゃんとした説明も大いに日本語の理解力を伸ばすのを促しました。

こういう風に、4年間ガリーナ先生を始め、日本センターの先生方に支えていただきながら、授業はもちろん、授業以外の日本の文化イベント、日本語能力試験、日本語弁論大会、作文コンクールなどにも楽しく参加ができ、無事に日本語講座を修了することができました。

日本センターでビデオコースと日本語初級1の学習者に日本語を教えることになり、今度ガリーナ先生にキルギス日本センターの日本語コースの主任講師として日本語の教え方を教わりました。先生の『漢字物語』は自分の学習で使っただけではなく、学習者に教えるのも効果的だと実感し、漢字を教えるのは楽でした。先生との講師同士のとき、規則性、論理性や明快さといった指導の基礎を学びました。

翌年日本へ留学する機会が与えられ、大学院に入って医学の専門勉強をしました。キルギス日本センターで身に着けた日本語の基礎がなければ、医学的教科書の熟読、学会での発表や論文執筆などがとても不可能だったでしょう。

日本滞在の時もガリーナ先生と数回お会いし、ガリーナ先生に、私がそのとき住んでいた福井県出身の一流の漢字学者の白川静先生の漢字に関する科学的な著書を紹介して頂いたり、浮世絵の展覧会などにご案内頂いたり、東京の面白い所をご案内頂いたりして日本への理解を深めることができました。

日常では先生は非常に控え目で話しやすい方です。どんな質問であっても、着飾ることなく優しく答えて下さるのが先生の特徴です。数回先生のお家へお邪魔したとき、おもてなしで暖かい雰囲気に入れられ、楽しいひと時を過ごしました。先生は編み物がとてもお上手で素敵なお洋服を作ります。助けを求める人間や動物に対して助けようという精神の強いガリーナ先生は何回も捨て猫の命を救いました。

先生の日本語とのご縁は驚くべきものです。先生は数学部を卒業して、コンピューターの仕事をして、46歳で日本語を勉強しはじめました。日本語に出会い、一目惚れされたそうです。その瞬間から日本語と離れることなく今まで歩いてこられ、政策研究大学院大学での博士号の持ち主です。

先生は日本語を教えると同時に才能のある和露通訳者と翻訳者で、数々の日本の大事な研究プロジェクトに参加されます。

人生の過程で色々な人に出会いますが、先生が最も勤勉な数人の方の一人かもしれません。常に日本語の研究をされたり、教科書や研究論文や辞書などを作ったり、積極的に国際学会に参加したりされますが、忙しいことを一切感じさせません。あんな規模の活躍ができるほど、ものすごい情報量をプロセスし、大事な所を抽出する能力のある先生の頭はスーパーコンピューターに例えても言い過ぎではないと思います。結果として、先生が日本とキルギスと他の旧ソ連の国に限らず、世界中日本語教育の学界で良く知られ、出版された書籍や研究論文の数と知識の深さに圧倒されます。

ガリーナ先生と出会ってから15年間以上経ちますが、先生のことを思う度に、暖かい気持ちになり、励まされます。何かやらなければいけないことがあり、難しく、自分にできるかと疑問に思うときがありますよね。そんなとき、個人的な事情や社会的な事情をよそにして全力を尽

くして目標に向かう、達成するまで頑張りぬくガリーナ先生の姿が浮かびます。「願望があり努力をなせばなる」と心に残る先生の言葉に力づけられます。

ガリーナ先生が数多くの人に日本語を教え、その人々は地球の色んな所に住み、現在日本語を使う使わないにかかわらず心の隅に日本と日本語への愛が潜んでいます。先生の学生である事を光榮に思うと共に、日本語教育への膨大なご貢献に、この場を借りて深い感謝を申し上げます。これからもずっとよろしくお願いいたします。

---

---

## 監修者後記

キルギスに一度も訪れたことのない私が、この本の監修にかかわらせていただけたことは、本当に光栄なことです。そもそものキルギスとのご縁は、この本の著者の一人であるガリーナ先生との出会いでした。私は JSL 漢字学習研究会（英語名 Japanese as a Second Language Kanji Research Group）で事務局を担当しており、研究会で発行する会誌の編集を手掛けています。その関係で、ガリーナ先生と会誌をめぐってやりとりするようになりました。そのうちに、一緒にお食事をしたり、公園めぐりをしたりと、プライベートでのお付き合いをするようになりました。ガリーナ先生が帰国されてからは、主にメールでのやりとりだけになりましたが、研究や仕事上のやりとりだけではなく、ガリーナ先生のお宅の花々の写真、キルギスの季節ごとの美しい風景や街中の写真を送っていただいたり、また、ノマドゲームが紹介されているウェブサイトなども教えていただいたりすることで、キルギスをとても身近に感じるようになりました。さらに、2016年9月に東京外国語大学で上映されたキルギス映画『山嶺の女王クルマンジャン』を見て、目の前に広がる美しい草原の風景とともに、キルギスの建国の歴史も学ぶことができました。この映画の上映に先立って、キルギスの文化・歴史・社会についてのレクチャーをされたのが、伊藤先生の教え子で東京外国語大学の職員をされているジャクシルクさんです（本書の付録を執筆）。

今回、ガリーナ先生と伊藤先生の対話を通じて、お二人がキルギスにおける日本語教育と研究のパイオニアであることが、読者の皆さんにもよくわかりいただけることと思います。お二人の歩んでこられた道は、キルギスの日本語教育の歴史そのものです。そして、その道は、クルマンジャンの作った道からずっとつながっているのだという思いを強くしました。お二人のご出身がロシアと日本ということで、それもまた多民族国家であるキルギスを象徴しているようにも思います。

お二人の対話をお読みになった方は、きっと、お二人に対して深い尊敬の気持ちを抱かれることでしょう。そしてそれと同時に、お二人からあふれ出る力のひとしづくをプレゼントされたように思われることと思います。自分も何かできるのではないか、これからも続いていく歴史の中で、自分も何らかの役割を果たしたい、そんな気持ちになられることと思います。おそらく、それをお二人も望んでいらっしゃると思います。

2016年12月

関麻由美

津田塾大学非常勤講師

---

---

## 著者略歴

### ガリーナ・ヴォロビヨワ (Galina Vorobeva)

1948年ロシアのイルクーツク市生まれ。1971年にスヴェルドロフスク市ウラル国立大学数学・力学部を卒業。専攻は数学。ソ連科学アカデミー・ウラル科学センター数学・力学研究所に勤務。1974年キルギスに移住。国営電力会社「キルギスエネルゴ」の自動制御装置部門勤務。

1999年キルギス共和国日本センターの日本語講座卒業、同センターの専任日本語講師、日本語講座主任講師を務める。その後キルギス国立総合大学で上級日本語講師。2012年から2016年まで国立国語研究所の共同研究員として研究活動をする。

研究分野は漢字教育。国際交流基金、博報財団などの研究プログラムで国際交流基金日本語国際センター、国立国語研究所、京都大学、東京国際大学、国際日本文化研究センターで外来研究員として研究する機会を得る。2014年5月に政策研究大学院大学で論文博士として博士号（日本語教育研究）を取得。

主な著書に『漢字物語Ⅰ、Ⅱ』、「構造分析とコード化に基づく漢字字体情報処理システムの開発」『日本語教育』149号、『構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化』（東京、ノースアイランド、2014年）、「非漢字系日本語学習者の漢字学習の支援を目指す漢字構造記述」『漢字字体史研究 二 字体と漢字情報』（東京、勉誠出版、2016年、共著）などがある。

日本、キルギス、ロシア、中国、韓国、ベトナム、トルコ、ドイツ、ウズベキスタン、カザフスタンで開催された国際研究大会で研究発表をする。キルギス共和国日本語教師会、日本語教育学会、ヨーロッパ日本語教師会、JSL漢字学習研究会、日本語教育方法研究会などのプロ組織の会員である。2000年から2004年までキルギス日本語教師会会長を務める。現在キルギス日本語教師会会報編集委員長と研究紀要『キルギス日本語教育研究』の編集委員会の委員である。

## 伊藤 広宣 (ITO Hironori)

1966年4月愛知県江南市生まれ。1991年創価大学法学部卒業。1996年キルギス国立総合大学大学院卒業。専攻一キルギス言語学。Ph.D. (2002年)。

モスクワ国立総合大学 (1988年～1989年)、ウラジオストク極東国立総合大学 (1990年～1991年) に留学。現キルギス国立総合大学大学院予科 (1991年～1993年) 同大学院課程 (1994年～1996年) にて学ぶ。

1991年9月にキルギス共和国キルギス国立総合大学 (1991年～1998年) に赴任。ビシケク人文大学 (1992年～1996年)、キルギス国立大学 (1998年～2010年) にて教鞭を執り、キルギス国立大学では、付属の東洋言語文化カレッジ学長顧問 (1998年～2001年)、日本語学科長 (1999年～2003年)、東洋語学科長 (2003年～2009年) を務める。

現在、キルギス・ロシア教育アカデミーにて、学長補佐 (2010年より)、ビシケク人文大学にて、学長顧問 (2011年より) を兼職。

『アルタイ仮説の問題 — 日本語とチュルク語の幾つかの類似の分析』、『日本語とチュルク語の文法概念の特徴と分析』、『日本語学習教材—文法』 (共著) など著作 20冊以上、100を超える学術論文を執筆。日本語教材・辞書、文芸評論、監修などにも携わる。

キルギス・日本友好協会副会長。国際社会アイトマートフアカデミー会員 (2002年)。

主な受賞は、キルギス共和国教育科学省大臣賞 (2001年)、日本国外務大臣表彰 (2013年)、ロシア連邦褒章国立委員会ミハイル・ロモノソフ金賞 (2006年)。

名誉学術称号に、キルギス国立教育大学付属東洋言語文化カレッジ教育学博士 (2001年)、アメリカ創価大学名誉学者 (2003年)。モスクワ経営法律大学名誉教授 (2006年)、ビシケク人文大学名誉教授 (2016年)、キルギス国立大学名誉教授 (2016年)。

**ПРЕПОДАВАНИЕ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА,  
СТАВШЕЕ СУДЬБОЙ**

**диалоги**

**Галина Воробьева и Хиронори Ито**

**人生をかけた日本語教育  
—実践と研究をつなぐ二人の対話—**

ヴォロビヨワ・ガリーナ 伊藤広宣

Редактор Маюми Сэки  
監修者 関麻由美

Дизайнер Элдияр Исаков  
デザイナー イサコフ・エルディヤル

Компьютерная верстка Гулзат Иманкулова  
DTP オペレーター イманклов・Гулзат

Подписано в печать 01.01.2017 г.  
Бумага офсетная. Формат бумаги 60x84<sup>1</sup>/<sub>16</sub>.  
Объем 5,0 п.л. Тираж 150.

---

Отпечатано в типографии «Фаст принт».  
Адрес: г.Бишкек, ул. Байтик баатыра (Советская), 59.  
Тел.: 0553 55 01 60.